

L・S(リリカル・ストラトス)

ハッピー野郎

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

世界最強の姉の2連覇を掛けた大会に向かう途中、誘拐されてしまった、【織斑 一夏】。

しかし、汚い連中の策略で、彼を助けにくるものは現れなかった。命の危険にさらされる中、彼は自分の世界からその姿を消す。

彼が目を覚ました時、そこに広がっていたのは自分のいた世界と似ているが、全く違う世界。

そして、自分の姿も変わっていた。身体が縮んだ姿で。

## 目次

無印前

L・s (リリカル・ストラトス) プロローグ | 1

第1話 目覚めたら Different world | 5

第2話 穏やかな暮らしの中で | 13

第3話 幽霊だからって何もできない訳じゃない | 22

第4話 『旅の始まり』 | 35

無印編

第5話 『俺は剣、きみは盾』 | 46

第6話 『チカラを持つ少女』 | 64

第7話 『繰り返されるあやまち』 | 81

第8話 『かつて手放したもの』 | 89

第9話 『邂逅する2人立ちはだから友』 | 101

第10話 『男は狼なのよ』 | 111

無印前

L・S（リリカル・ストラトス）プロローグ

〈一夏視点〉

俺、織斑一夏は現在謎の組織に拉致されています。

謎の組織と言われて、どこの漫画やアニメだと思っただろうが実際拉致された。

まあ、誘拐された理由は、およそ見当がついている。

本日ある世界大会の決勝戦に俺の姉である、【織斑 千冬】は出場しようとしていた。

そのある大会とは、I・S世界大会

通称『モンドグロツソ』

その第二回決勝戦が行われようとしていたのだ。

まずI・Sについて説明すると、

正式名称インフイニット・ストラトス

現行するすべての兵器を凌駕するほどの力を持ったパワードスーツである。

それにより世界は実質的に、I・Sに支配されることになった。

だが、I・Sは、女性にしか操ることができないため必然的に女尊男卑の社会ができあがってしまったのだ。

そして、【千冬】姉はそのI・Sの世界最強のパイロットであり、

『第一回モンドグロツソ』の初代チャンピオン、『ブリュンヒルデ』である。

今回その大会の二連覇をかけて決勝戦が始まろうとしていて、その応援に向かう途中で俺は誘拐されたのだ。

そして、誘拐犯の狙いはおそらく、千冬姉の二連覇阻止。

誘拐された時、すぐに目と耳を塞がれ拘束。近くに待機させていただろう車に詰め込まれた。ここまでの手際の良さからして、かなり周到な計画を練って実行したのだろう。

千冬姉なら俺が誘拐されたことを知れば決勝を放り出してでも駆

けっけるはず。

だが、それはあくまで本人に直接連絡が入った場合はだ。

誘拐犯 A

「ちくしょう！なんで織斑千冬が決勝に出場しているんだ!?!?」

誘拐犯も当の本人が、自分達の狙いとは反対の状況に動揺している。

周りの人にとって俺は

『世界最強の付属品』

『出来損ないの弟』

などと、俺自身気にしないようにしていたが、周りからはそんな後ろ指をさされ続けていた。

当然日本政府も俺の存在は煙たく思っていたはず。

犯行声明を受け取ったのが日本政府だったなら、「千冬」姉に伝えずそのまま決勝に出場させたのだろう。

でも、実際に自分の母国から見捨てられるなんてな。

誘拐犯 B

「知るかよ！ちゃんと犯行声明は出したはずだ!?!?」

誘拐犯 C

「だがどちらにしても計画は失敗だ」

誘拐犯 A

「くそ！せっかく危険を犯してまで

ブリュンヒルデの弟を拉致したってのに!」

一夏

「グッ！ガフッ!」

誘拐犯の一人が逆上して俺を殴り始めた。身体を拘束されているので良いサンドバッグにされてしまう。

誘拐犯 B

「おい？あんまりやり過ぎんなよ?」

誘拐犯 A

「だが！このままじゃ俺達は間違いなく組織に消されるぞ!」

誘拐犯 B

「大丈夫さそいつを殺って直接

織斑千冬に送りつけりや世界最強も表舞台から消えるだろうよ」

誘拐犯C

「そうゆうことかなら？」

誘拐犯は俺に拳銃を突き付けてきた。

誘拐犯B

「へへ恨むなら助けに来なかった姉を恨むんだな」

殺されるそう思ったとき俺は、心の中で叫んだ。

一夏

(ちくしょう！俺はまだ家族を千冬姉のことを守ることもできないのか？)

正直、俺にとって、日本国の都合なんてどうでもいい。

ただ、俺のせいで【千冬】姉に迷惑をかけてしまうことに、自分の不甲斐なさに嘆くことしかできなかった。

一夏

(こんなところで俺はまだ死ねないんだ！)

その瞬間、俺の周りが光に包まれた。

誘拐犯

「なんだ！この光は？うわー！」

しばらくすると光が収まり周囲には気絶した誘拐犯だけ。

【織斑 一夏】という人間は、この世界から消え去ったのだ。

〜千冬視点〜

私は今、【一夏】が監禁されていた場所にいた。

私が【一夏】の誘拐を知ったのは、決勝戦が終了後、【東】が傍受した情報とドイツ軍からの報告で知ったのだ。

その時日本政府の狸共をどうしてやろうかと思ったが今は【一夏】を助けたしかなかった。

だが現場には、誘拐犯の姿と【一夏】のと思われる血痕しかなく本人の姿はどこにも無く、行方不明という結論が出されたのだ。

千冬

「何が世界最強だった一人の家族すら助けることができず……

すまない、父さん、母さん……

すまない……【一夏】……【一夏】くく！アアアアア！」

私は自分の無力さに泣き叫ぶことしかできなかつた。

く一夏視点く

身体が重い。意識が遠く……俺は、死んだのか？

???

「ママ！ママ！大変！男の子が倒れてる！」

誰かの声が聞こえる。

???

「まあ！ひどい怪我！すぐに病院に！」

誰かが俺を見つけたのか。少なくとも、あの誘拐犯ではなさそう

だ。

???

「でも、なんでこんな小さい子供がこんなところに？」

子供？俺はもう、中学生……だ……ぞ。

俺はまた意識が遠く……ただ、失う直前、誰かの暖かい腕の感触が

俺を包み込んでいた。

t o b e c o n t i n u e d

第1話 目覚めたらDifferent world  
d

くく一夏視点くく

一夏

「ん……う……ああ……」

鼻をつく消毒薬独特の匂いで目を覚ます。

一夏

「ここは……病院……か？」

ベッドから身を起こし、周りを見回し、自分の着ている病衣。数床のベッドに、清潔な部屋を見れば、大きな病院ということはわかる。

一夏

「確か俺は誘拐されて、そして……」

俺は誘拐犯に殺されなかった。しかし、その後の記憶が酷く曖昧だ。

一夏

「でも、誰が俺を病院に？」

あの誘拐犯が人通りのある場所に俺を監禁していたとは思えない。俺が仮にあの場から脱出できたとしても、俺を病院に運んでくれた人が通りかかったなんて運が良すぎる。

すると、病室の扉が開く。

???

「あ！目を覚ましたんだね！」

入ってきたのは、金髪の女の子。歳は4く5歳ってところだろう。

一夏

「君が俺をここに？」

少女

「うん！わたしの名前は、【アリシア】。【アリシア・テストロッサ】。わたしとママがキミを見つけて、ここに運んだんだよ！」

どうやら、【アリシア】とこの子の母親が俺を見つけて病院に運んで



くれたのか。

礼を言わないとな。

???

「こらあ、【アリシア】。病院で走ったらダメでしょ」

言っている、【アリシア】の母親もやって来た。

アリシア母親

「あら？目が覚めたのね？よかったわ。あなたを見つけた時はひどい怪我だったもの」

一夏

「えっと、あなたは？」

アリシア母親

「私は【プレシア・テストアロッサ】。名前からもわかる通り、【アリシア】の母親よ」

一夏

「ありがとうございます、【プレシア】さん。それで、【プレシア】さん、ここはどここの病院ですか？」

【アリシア】の母親の【プレシア】さんに頭を下げながら、ここがどこか聞く。なんとか【千冬】姉と連絡がつけばいいんだが。

アリシア母親

「ここは《ミッドチルダ》の総合病院よ」

一夏

「《ミッドチルダ》？」

《ミッドチルダ》なんて名前の場所、聞いたことがないな。

プレシア

「それよりも、これってあなたの持ち物かしら？」

【プレシア】さんが出したのは、俺が着ていた制服。さすがに携帯や財布は誘拐犯に奪われてしまっていたが。

一夏

「ええ。間違いありません」

プレシア

「そう、参ったわね。これじゃあ、あなたの身元を確認するものが無い

わね」

一夏

「は？いや、その生徒手帳で俺の身元はわかるはずですが？」

畳まれた制服の上には俺の通っていた中学の生徒手帳が乗っている。それなら俺の身元がわかるはずだが。

プレシア

「え？でも、これに写っている、【織斑 一夏】君は中学の子よね？でも、あなたは……」

【プレシア】さんが病室の鏡を目で指す。俺も鏡を見ようと、ベッドから降りる。

一夏

「え？あれ？」

ベッドから降りた途端、なぜか目線が低く感じたが、そんなことよりも鏡の前に立つ。

一夏

「な、なんじゃこりゃー！ー！」

鏡の前に写っているのは俺の姿。しかし、中学の俺よりも明らかに幼い姿だったのだ。

〜数日後〜

2〜3日の入院の後無事退院できた。

入院していた間に、【プレシア】さんからこっちの世界のことを教えてもらったが、信じられない話、《ミッドチルダ》は地球とは違う世界のようなのだ。

さらに、夢のような話、《ミッド》とは魔法が発展している世界とのこと。と言っても、科学が劇的に進化を遂げたことにより、それに適応する人物とそうでない人物に分けられるそうだが。

話を戻し、無事退院できた俺だが、身元が確認できない俺に行く当てなどない。ましてや、現在の俺は見た目は完全に子供。

こっちの通貨など持っているはずも無く、俺に入院費用が払えるはずもない。費用に関しては【プレシア】さんが支払ってくれた。

【プレシア】さんには本当に頭が上がらない。

その後、俺は【プレシア】さんと【アリシア】の家へ案内され、事情を説明していた。

プレシア

「それじゃあ、あなたはこの写真の【織斑 一夏】君で間違いないのね？」

一夏

「はい。それで間違いありません」

【プレシア】さんも信じられない様子。いきなり違う世界に飛ばされて、挙句身体が縮んだなんて俺自身信じられないんだから。

プレシア

「それと、あなたのいた世界は《ミッドチルダ》じゃなく、《地球》という世界なのよね？」

一夏

「はい。俺の出身は、《地球》の……」

俺は改めて、一から十まで俺の出身地を説明するが、【プレシア】さんも浮かない表情は変わらない。

プレシア

「……そう……」

一夏

「やっぱり、信じられませんよね……」

プレシア

「あーごめんなさいね。あなたのことを疑っている訳じゃないのただ……」

【プレシア】さんは頭を抱えている。

プレシア

「あなたの住む、《地球》という世界は確かに存在するわ。ただし、管理外世界にね」

一夏

「管理外世界？」

プレシア

「この《ミッドチルダ》を含めた管理世界には、《時空管理局》という

そこに所属している世界の治安維持を目的とした組織が存在しているの」

所謂、地球の警察みたいなものってところか。  
プレシア

「そして、管理局が所有する戦艦を使わない限り、次元移動手段のない《地球》はそこに所属していない、《第97管理外世界》という世界に当たるから、そう簡単に行くことは難しいの。

そもそも、「一夏」君は身元が……」

一夏

「あくですよねえ……」

現在の俺に身元を保証するものが無い以上、《管理局》に保護を求められるか怪しいものだ。

下手すりや密航者扱いで逮捕なんて……

プレシア

「それで、1つ提案があるんだけど……」

一夏

「……え？」

「プレシア」さんから何か提案があるという。

プレシア

「しばらくの間、君を私の方で引き取ることにしたいんだけど、どうかしら？ 私、魔導研究者を務めているから、少なからず《管理局》とも関わりを持っていてから、いつかは保証することはできないけど、地球に君を送り届ける目処を立ててみせるわ」

一夏

「……それは……」

俺としては、住む場所を提供してくれることは願ったり叶ったり。断る理由がない。

一夏

「プレシア」さんは良いんですか？ 俺なんかを引き取るなんて？」  
プレシア

「袖振り合うも何かの縁って言うでしょ？ それで、交換条件って言う

ほどこじゃないんだけど……」

一夏

「いえ、ここまでしてもらうんです。俺にできることはなんでも言うてください」

俺だって、【プレシア】さんにここまでしてもらっているのに、それに甘んじるなんてできない。

プレシア

「あの子の、【アリシア】と一緒にいてもらってもいいかしら？」

一夏

「・・・へ？そんなことで良いんですか？」

そんな単純そうなことを頼まれて正直、拍子抜けしてしまう。

プレシア

「恥ずかしい話、仕事ですれ違ってばかりで、あの子の父親とはあの子が2歳の時に……それ以降は女手一つであの子を育てたけど、あの子に母親らしいことをあまりさせてあげることが出来なくて、今も寂しい思いをさせてばかりなのよ。だから、あなたがあの子と一緒にいて、少しでもあの子の寂しさを紛らわしてくれればと思うんだけど、ダメ・・・かしら？」

一夏

「【プレシア】さん……」

女手一つか。そういえば、俺も物心ついた時から両親の記憶なんて無くて、【千冬】姉に女手一つでここまで育ててもらったな。【千冬】姉が家を開けるようになってから、俺のためってわかっている、やっぱり寂しいって気持ちは俺にはあった。

【アリシア】だってその気持ちはあるはず。

一夏

「わかりました。俺で良ければ、そのお話受けます。これから、よろしくお願いします」

プレシア

「そう！ありがとう、【一夏】君……」

【プレシア】さんも喜んでくれている。

すると、【アリシア】がネコを抱きながら部屋に入ってきた。  
アリシア

「ねえ、ママ。お話終わったの？」  
プレシア

「ええ。それと、今日から【一夏】君は、うちで暮らすことになったからね」

アリシア

「え！本当!?？わーい！良かったね、【リニス】？」

リニス

「にゃ〜」

【リニス】と呼ばれた猫が返事を返す。【アリシア】も俺と一緒に暮らすことを喜んでくれて良かった。

しばらくは、この2人+1匹が俺の家族。

なんとか、やっていけるような、そんな気がしたのだった。

To be continue

幕間〜プレシア〜

プレシア

「そうだ、【一夏】君。これも君の物で良いのかしら？」

君の側にあつたものなんだけど」

私を取り出したのは、一個の白いブレスレット。

これは、彼を見つけた時に彼の身体から落ちてきたものだから、おそらく彼の物だと思う。

一夏

「いえ。俺には覚えがありませんね」

しかし、彼自身には見覚えがないそうだ。

プレシア

「そう。良かったら、君が持っていてくれないかしら？」

一夏

「え？わかりました。まあ、御守り代わりに持ってますよ」

なんとなく、彼が持っているべきだと感じ、ブレスレットを【一夏】君に渡す。

彼はそのまま受け取り、自分の腕につける。

ただあれって、魔導師の使うデバイス。それもかなり高ランクのデバイスに思えたが、特になんの反応も見せなかったので、気のせいだったかしら。

## 第2話 穏やかな暮らしの中で

〜プレシァ視点〜

プレシァ

「ただいま〜！」

アリシァ

「おっかえり〜！」

リニス

「にやにや〜くん！」

仕事ですっかり遅くなったにも関わらず、私の帰りを待っていてくれていた【アリシァ】と【リニス】が出迎えてくれた。

どんなに仕事が忙しくて、疲れても、この子達の顔を見れば疲れなんて吹き飛ぶわ。

一夏

「おかえりなさい、【プレシァ】さん」

プレシァ

「ただいま、【一夏】君」

【アリシァ】と【リニス】に遅れて、先日に私達の家に行って来てくれた、管理外世界から突然飛ばされてやって来た、【織斑 一夏】君が現れる。

一夏

「夕飯、できてますよ」

【一夏】君の案内でリビングへ行くと、そこには、湯気を立てている夕飯が並べられていた。

それも、私の作り置きした出来合いのものではなく、明らかに作り立てのもの。

プレシァ

「美味しい……」

アリシァ

「うん！ほんとほんと。【一夏】のご飯、美味しくって、たくさん食べれちゃうね！」



リニス

「にやふにやふにやは！」

【アリシア】も【リニス】も、彼の作った食事に舌鼓を打っている。誰かが作ったものなんて、久しく食べてなかった気がするわ。

アリシア

「あのね、あのねママ！わたしも作るの手伝ったんだよ！」

一夏

「って、お前はつまみ食いしてただけだろうが？」

アリシア

「ぶくく味見だって立派な手伝いですよくだ！」

【アリシア】も【一夏】と兄妹のように打ち解けているようであり、

まあ、彼を引き取るって言った時もすぐに受け入れてくれたから問題はなさそうだったけど。

プレシア

「……」

でも、こうして【アリシア】が楽しそうにしているのを見ると、本来なら私がそうしなくてはいけないはずなのに、仕事を理由にして、彼を元いた世界に帰すという条件を餌にすることで、その役目を彼に押し付けてしまっているのでは無いかと。

一夏

【プレシア】さん……」

プレシア

「え!? な、なにかしら？」

そんなことを思っていたとき、突然【一夏】君から呼びかけられ、動揺してしまう。

一夏

「俺は、今のこの暮らしを重荷と感じたことなんて、まったくありませんよ」

プレシア

「……え？」

私を感じていたことが顔に出ていたのか、あっさり【一夏】君に気

付かれていた。

しかし、彼からの返事に私は拍子抜けしてしまう。

一夏

「この世界にいきなり飛ばされて、行く場所も、身寄りの無い俺に手を差し伸べてくれた。それに……」

プレシア

「それに？」

一夏

「俺には生まれついて両親との思い出がありません。もし、俺に両親の記憶があったなら、こういう当たり前の日常があったのかなって。

だから、俺にこの日常を送らせてくれた「プレシア」さんには恩しかないんです」

プレシア

「一夏」君……」

彼がここまで思ってくれてるなんて。なら私は、少しでも《管理局》との渡りをつけて、彼を無事に地球へ返すために尽力するのが私がやるべきことよね。

☆☆☆

〵〵一夏視点〵〵

週末の休みに、「プレシア」とさんと「アリシア」、「リニス」と俺の3人（+1匹）で近くの山へピクニックに出かけた。

もともと俺がこっちに飛ばされる前から2人と1匹の行事であったようだが、最近、「プレシア」さんの仕事が忙しくて滅多に行くことができていなかったようだが。

アリシア

「本当、「一夏」が来てから、毎日が楽しくって仕方がないよ！」

一夏

「別に俺はなにもしていないんだが？」

アリシア

「ううん。「一夏」が来てくれただけでも、前よりも賑やかになったんだよ。ね、「リニス」？」

リニス

「にやあくん！」

改めてそう言われると、なんだか照れるな。

アリシア

「もうすぐわたしの誕生日だったんだけど、その前にわたしに弟とも言える新しい家族ができた気分だよ。本当は……」

一夏

「って、お前と俺、どっちが年上だと思ってるんだ？」

俺の年齢は、元々の年齢もそうだが、今の見た目は9〜10歳くらい。対して、「アリシア」はまだ4歳。明らかに俺の方が年上。

アリシア

「ぶ〜〜後からうちに来たんだから、「一夏」は弟だよ。」

それに、わたしだってそのうちママみたいな、ばいんばいんのナイスバディになるんだからね〜〜！」

いったい何年先の話やら。つと、話の引き合いに出された「プレシア」さんの方を見ると、酷く疲れを見せた表情をしていた。

一夏

「あの、大丈夫ですか、「プレシア」さん？」

プレシア

「あーっ、ごめんね。だいぶ開発が佳境に入ってきたせいか、忙しさが増して……って、私ったら、こんな日に仕事の話をするなんて……」

一夏

「「プレシア」さん……」

「「プレシア」さんはあまり家では仕事の話はしないが、研究者として開発のかなり上の立場の人間らしい。」

そのせいか、徐々に家に帰ってくる時間が遅くなっているのだ。それこそ、「アリシア」が寝静まってから帰ってくることもしばしば。

まったく、ブラック企業ではないのかと疑ってしまう。

プレシア

「でも、このプロジェクトが成功すれば、長期休暇が取れるから、そうすれば、地球へ君を送ることができるから」

一夏

「本当に、ありがとうございます……」

こんな素性の知らない俺にここまでしてくれるなんて、【プレシア】さんにはまったく、足を向けて寝れない。

アリシア

「ねえねえ……」

一夏

「ん？どうした、【アリシア】？」

すると、【アリシア】が俺を呼ぶ。

アリシア

「あのね、その時はさ、わたしも【一夏】のいた地球に行ってみたい！」

一夏

「……は？」

突然【アリシア】が、自分も地球に行きたいと言い出す。

アリシア

「だって、【一夏】はもう、わたし達の家族なんだからだから。だから、見てみたいんだ、【一夏】の世界をさ。」

ね、いいでしょ、ママ？」

プレシア

「ええ、そうね。私も、見てみたいわね」

一夏

「あ……」

家族……。生まれついて両親の記憶の無い俺にとって、元いた世界での家族は【千冬】姉だけ。

もし、俺に【千冬】姉以外の家族がいたのなら、この日常こそが……なら俺は、この世界での俺の家族を守りたい。

それが、この世界で俺がやるべきことなんだ。そう思えた。

☆☆☆

あのピクニックから数日後。いつものように、【プレシア】は仕事。【アリシア】と【リニス】はリビングで遊び、【一夏】は現在、掃除を

していた。

一夏

「さて、この部屋か……」

【一夏】はある一室の掃除に取り掛かる。それは、【プレシア】の私室。基本彼女は【一夏】達に仕事の話はせず、職場か私室のみで行う。

一夏

【プレシア】さん、朝出る時の様子がおかしかったから、少し気になっちゃまったんだよな」

【プレシア】は自宅を出る時も浮かない顔に、『日程が……』、『安全基準が……』と呟きながら仕事に出て行った様子に、【一夏】は気になっっていたのだ。

一夏

「ま、当然か。重要なデータ類は持って帰るはずないしな」

部屋は散らかっておらず、パソコン一台と、数枚の書類のみ。

置かれているパソコンを調べようにも、パスワードが必要なため、開くことが出来ない。

一夏

「ん？気のせいか？一瞬、ブレスレットが光ったような……」

【一夏】が不意に腕を見る。それは、彼の腕にはめられていたブレスレットが光ったように見えたからだ。

アリシア

【一夏】！」

一夏

「おわっ！どうしたんだ、【アリシア】？」

すると、突然部屋に、【アリシア】が酷く慌てた様子で飛び込んできた。

アリシア

「いいからすぐに来て！」

【アリシア】は、そのまま【一夏】をリビングへと引っ張って行く。リビングに入ると、【アリシア】は窓の外を指差す。

一夏

「なんだよ、あの光？それに、あの方角は、『プレシア』さんの……」  
【アリシア】が指した方角は『プレシア』の職場がある場所。そして、そこから金色の光が溢れ出し、こちらまで迫って来ていたのだ。

アリシア

【一夏】……」

リニス

『にゃ〜』

一夏

【アリシア】！俺から離れるな！」

【二夏】は【アリシア】を庇うように抱き寄せる。【リニス】も不安そうな鳴き声をあげながら2人へ歩み寄ろうとした。

一夏

(頼む！せめて、家族だけでも守ってくれ！)

【二夏】はそう強く願う。

次の瞬間、【二夏】の腕にはめられているブレスレットがひととき強く輝く。

それと同時に、金色の爆発が包み込んだ。

☆☆☆

〜〜プレシア視点〜〜

プレシア

【アリシア】！【一夏】！」

前任者の杜撰な資料管理。安全基準を完全無視した意図的な改ざんなど言い出せばキリが無い。

そんな中で行われた、依頼元の命令による、一月も早められ実施された、新型駆動炉の実験。

案の定事故が起こり、その規模は、2人のいた場所まで及んでいた。すぐに自宅に戻り、すぐに2人の姿を探す。

しかし、2人がいた形跡はあれど、2人の姿は無く、リビングで事切れた【リニス】だけしかいなかった。

プレシア

「ああ……あああああ！」

この仕事がひと段落したら【アリシア】に母親らしいことをしようとしていたのに。彼を必ず元の世界に帰すと約束していたのにも関わらず、その約束を果たせず、2人をこんな形で巻き込んでしまった自分の無力さに、ただただ声が枯れるまで涙を流した。

☆☆☆

くく一夏視点くく

一夏

「ん……こ……は……？」

俺が目を覚ますと、見知らぬ町の公園。

たしか、【プレシア】さんの職場で起こった爆発が俺達を襲ったところまでは覚えているが、そこからの記憶が無い。

一夏

「そうだ、【アリシア】は!?!?」

俺は慌てて【アリシア】を探すが、見つからない。

すると、向こうから通行人らしき人がやって来た。

一夏

「あ、すみません!ここら辺で、金髪の女の子を見かけませんでしたか?」

通行人

「……」

一夏

「あ、ちよつと!」

しかし、通行人の肩を掴もうとしたが、掴み損なつたのか、手はすり抜け、通行人はこちらに目もくれず行ってしまふ。

だが、さっきの通行人。こちらを明らかに無視していた訳ではなく、まるで、最初からこつちに気づいていないような様子だった。

不意に自分の身体に違和感を感じ、通行人に伸ばしていた自分の手を見る。

その手は、向こうの道が透けて見えていたのだ。

一夏

「もしかして、周りの人に俺って見えてないのか?」

それは、手だけでなく、全身が透けていた。  
まるで、幽霊のように。

T o b e c o n t i n u e



### 第3話 幽霊だからって何もできない訳じゃない

くく一夏視点くく

さて、状況を整理しよう。さつきまで「アリシア」と家にいたはず。そこで突然、「プレシア」さんのいた研究所から爆発が起こり、俺達を襲った。そして、目覚めたら見知らぬ場所。「アリシア」とも逸<sup>はく</sup>れてしまったようだ。

しかし、今俺がいる場所は《ミッドチルダ》とは違い、俺のいた地球と景色が似ているが。

そして……

一夏

「俺の姿はというと、なぜか透けていて、他の人から認識すらされないときた」

試しに、手くのひらを太陽にく透かして見ればく♪

一夏

「真っ赤に流れる血潮じゃなく、真っ青な空に、真っ白な雲の流れが見える」

うん、紛うことない幽霊、またの名をゴーストだ。

つまり、俺って死んだのか？幽霊ってどんなもんか知らないけど、俺自身、死んだって実感無いし、足も付いてる。

一夏

「そもそも、こんな時間で、こんな場所に幽霊ってのも場違いだよな」俺が現在いる場所というのは、太陽の向きから夕暮れ間近だが、まだ昼間の公園。

そこそこ広さがあるため、遊具で遊ぶ子供。話に花を咲かせているママ友の姿がちらほら見える。

子供

「ああー風船……」

すると、子供の1人が持っていた風船が風にさらわれ、飛んでいく。

子供

「んっ！んっ！取れへん……」

運良く木に引つかかる。しかし大人でも登らないと取れないところに引つかかってしまい、子供も必死で飛び跳ねて取ろうとするが、届くはずもない。

そういえば、幽霊って浮けるよな。

浮くイメージがどういふ風なのかいまいちイメージが湧かないが、試しにこうジャンプするように。

一夏

「おっ・おっ！」

すると、明らかにジャンプした程度では上がらないくらいの高さまで浮き上がり、そのまま風船のところまで届く。

一夏

「つと、幽霊だけど、物に触ることってできるのかな？」

意識を集中させながら、木に引つかかっている風船のヒモに手を伸ばす。

一夏

「お、取れた……」

幽霊だから手からすり抜けたりすると思ったが、普通に掴むことができた。

そのまま風船を持って子供の元まで降り、子供に風船を渡す。

子供

「はー」

子供はポカーンと呆けながら風船を受け取って、そのまま親の元まで戻って行く。

ただ、なぜか子供と目が合っている気がするが。

子供

「あのね、風船が飛ばされてもうたんやけど、男の子がピュッって浮いて、風船を取ってくれたんよ！」

けど、そのあとすぐにスーッと消えてもうた……」

親

「は、そりゃ良かったな」

子供がそのまま親に、今起こったありのままを話す。

話を聞いた親から見て、子供の夢の話と思っている。

でも、あの子供とその子の親の喋り方、関西弁、もしくは京都弁だよな。

もしここが地球なら、関西地方らへんなのか？

だが、それ以上に……

一夏

「もしかして、あの子供に俺の姿見えてた？」

まあ、子供って見えないものが見えるって言うからな。

しかし、一回現れ、すぐに消えたとは、一体……

つまり、なにかのきっかけで見えるようになったってことか？

一夏

「ん？あの子……」

ふと、向こうのベンチに座っている1人の幼い女の子が目につく。

一夏

「あの子のあの目……」

その子の目が、あまりにも似ていた。

それは、昔の自分と重なって見えるほどに。

???

「あーあ、なあんか、ここら辺なんか雰囲気暗くね？」

???

「そうだな。なんかこいつの周りだけ、やけに重苦しいな」

???

「こういうやつが1人いるだけでも、せつかくの楽しい公園が台無しになるよなあ」

すると、その子の周りを同年代の子供が数人取り囲む。

所謂、悪ガキってところか。

女の子

「……………」

しかし、言いたい放題の悪ガキに対し、女の子は何も言い返さない。ずいぶん大人びていると思ったが、女の子はグッと涙を堪えている。

一夏

「子供のケンカに大人（現在見た目子供、ましてや幽霊）が入るのはどうかと思うが……」

1人に、それも女の子によつてたかつてのは見過ごせないな。少し灸を据えてやるか。

もうすぐ夕暮れ。シチュエーション、今の俺の状況はこれほど最適なものはない。

俺は女の子の背後にゆつくりと回り込む。

悪ガキ

「「かーえーれー！かーえーれー！」」

???

「おい！テメエ「ウルセエヨ……」へ？」

突然木がざわつき、悪ガキ達の周りに声が響く。

悪ガキ1

「お、お前何か言ったか？」

悪ガキ2

「な、なにも言つてないよ」

悪ガキ達は辺りを見回すが、声の主は見つからない。

声

「オマエラが五月蠅くて、ゆつくりと眠れないだらうガ」

そして、女の子の背後からスーッと、宙を浮く半透明な姿で【一夏】が現れる。

それを見た悪ガキ連中は、

悪ガキ1

「お、おぼけだー！」

悪ガキ2

「怖いよー！」

悪ガキ3

「パパーー！ママー！」

???

「お、おい！待てよ！」

作戦成功。幽霊という今の状態を上手く利用することができ、悪ガキ達は一目散に公園から逃げて行く。しかし、1人多かった気がするが。

女の子

「???

女の子も今起こったことに周りを見回し、背後をゆつくりと振り返り、俺とバツチリ目が合う。

一夏

「えーと、こんにちは〜」

こちらとしては友好的に挨拶。しかし幽霊の姿で。

女の子

(ふっ……)

女の子は突然目の前に現れた幽霊に、座っていたベンチの上で気絶してしまった。

一夏

「どうするよ、これ……」

まあ、当然の反応だな。とりあえず、この子が眼を覚ますまでいてやるか。

☆☆☆

〜少女視点〜

女の子

「んにゃ……んん……」

あれ？わたし、寝ちやってたのかな。お母さんもお姉ちゃんもお兄ちゃんも忙しくて、1人で公園に来て、そしたら知らない子たちにいるなり酷いこと言われて、悔しかったけど、これ以上家族に心配かけたくなくて我慢してたらそれで……

???

「お、目が覚めたのか？」

女の子

「ふえっ!?!?」

いきなり男の子から声かけられる。そういえば、あの知らない子

たちが突然わたしの後ろを見て逃げ出して、わたしも後ろを見たらそこ  
にいたのは……

ううん。きつとわたしの見間違いの。

わたしは、声をかけてきた男の子の方を振り向く。

一夏

「悪かったな。お前まで驚かせちゃって」

わたしのとなり男の子がいた。けど、足は宙に浮いて、身体は半  
透明。

女の子

「うにゃー！おぼけー！」

目の前にいた男の子は明らかに幽霊。わたしも逃げたかったけど、  
腰が抜けちゃって動けない。

一夏

「だ、大丈夫だって。別にとって食ったりしねーよ！」

女の子

「うう…ほんとう？」

そう言った幽霊さんは、よく見たら、わたしより少し上くらいの男  
の子だ。

女の子

「あなたは、どうしてこんなところにいるの？」

一夏

「さあな。俺も気付いたらここにいたんだ」

女の子

「そうなんだ」

怖いって気持ちはどこかに行っちゃって、いつの間にか目の前の幽  
霊さんとは普通に話すことができたの。

一夏

「次は、俺からーついいいか？」

女の子

「うん、なあに？」

幽霊さんは、わたしになにを聞きたいんだろう？

一夏

「おまえ、なにか無理してないか？」

女の子

「・・・ツ!??そ、そんなこと、ないもん……」

少女は誤魔化す。

いきなり見ず知らずの幽霊からそんなことを言われ、自分の胸の内を覗き見られてしまったような気がしたからだ。

一夏

「おまえ、隠し事が下手だな。おまえの目、いかにも何か抱えていますって言ってるぞ」

女の子

「あ、あなたにわたしのなにがわかるっていうのさ!」

幽霊さんの言う通り。けど、絶対に喋っちゃいけないの。お母さんたちにこれ以上心配させたくないから。

一夏

「おまえがなにを思っているかなんてわからねえよ。けど、おまえみたいな目をしたやつのことなら知ってる」

女の子

「・・・え?」

一夏

「さて、ここで昔話をしようか……」

すると、幽霊さんが昔話をすると言い、話し始める。

一夏

「ある男の子がいました。その男の子は当たり前のように育ちましたが、その男の子は物心ついたときから両親がおりませんでした」

女の子

「お父さんとお母さんが?」

そのお話に出てきた男の子、もしかして、その男の子って幽霊さんのことなのかな。生まれた時からお父さんもお母さんもいなくて育ったなんて、わたしだったら、すごくさみしくて、毎日泣いちゃうの。

一夏

「ですが、男の子は決して1人じゃありません。それは、彼の唯一の家族として、姉さんがおりました」

女の子

「お姉ちゃんが？」

そっか、独りぼっちじゃなかったんだね。それを聞いて、わたしもホッとしましたの。

一夏

「しかし、男の子の姉さんは、来る日も来る日も男の子を育てるために、学校に通いながら、仕事にも出ておりました」

女の子

「え……それって……」

まるで、今のわたしと同じ。お父さんがお仕事中、大怪我で入院して、お母さんとお兄ちゃんお姉ちゃんも毎日家の仕事で忙しくしている今のわたしの状況と。

一夏

「そして、男の子もまた、そんな姉の背中を見て、少しでも姉さんに心配をかけさせまいと、自分の胸の内を隠し続けました。決して弱さを見せまいと、時に己の限界も考えない無茶をするほどに」

女の子

「幽霊さんもそんな……」

一夏

「おいおい、なんで俺なんだ？あくまで、この昔話に出てくる男の子の身の上話だぞ？」

女の子

「むう……」

幽霊さんは、あくまで自分の話じゃないって話す。

でも、幽霊さんもお姉さんに心配かけさせたくなくて、そんな風にわたしも、自分がお母さん達にできることがわからなくて、ただみんなに心配かけさせたくないって気持ちだけがある。

一夏



「しかし、姉に心配かけさせないためと、そんな自分を顧みない行動が良い結果を出すはずも無く、男の子は身体を壊すことになりました」  
女の子

「そんな。そんなことになるなんて……もしかして、幽霊さんがそんな風になったのって……」

幽霊さんがお化けになって出たのって、それが原因で心残りがあったて……

一夏

「いや、今の状況とこの話は全く関係ない」

女の子

「あう……もう！じゃあ幽霊さんはその昔話をして何が言いたいのさ!?？」

幽霊さんの昔話に、幽霊さんはわたしになにを言いたいのかわからない。

一夏

「まあ、続きを聞いてくれよ。その男の子が目を覚ました時、真っ先に現れたのは、その男の子の姉さんだった。

そして、その男の子の姉さんは、男の子にこう言ったんだ。

『どうして、そんなになるまで私に言ってくれなかったんだ』  
って。つまり、その男の子がやってきたことは、自分の姉さんを悲しませることではなかったんだ」

女の子

「そんな……じゃあ、わたしも……」

今自分がお母さん達のためって思ってることは……

一夏

「結局、人の心の中なんて、いくら家族でもわかるわけない。

そして、直接家族に話して聞くしか知る方法なんてないんだよ。

だから、お前も自分の中で無理していることがあるなら、ちゃんと家族と話してみろ」

女の子

「でも……」

もしお母さん達から受け入れてもらえなかったら、わたし。

一夏

「言っただろ。ちゃんと直接話してみるしかわからないって。

自分の心が命じたなら、それが自分が一番したいことなんだ。

勇気を出して聞いてみる。きつと上手くいくさ」

女の子

「・・・ッーうん！」

なんだかわからないけど、幽霊さんの言葉には、なんとなく自身が持てる。

一夏

「はは、良い笑顔だな。そうしてる方が、俺はかわいいと思うぞ」

女の子

「ふえっ！か、かわいいって・・・／＼／＼／」

いきなりかわいいって言われて、照れちゃうの。

一夏

「ん、どうかしたか？」

女の子

「う、ううん！あ、そうだ、よかったら、幽霊さんの名前教えてほしいの。わたしの名前は、【高町 なのは】。【なのは】って呼んで！」

いつまでも幽霊さんっていうのは失礼だと思って、幽霊さんの名前を聞く。

一夏

「俺か？俺の名前は・・・「なのは！」ん？」

なのは

「ふえ？あ、お兄ちゃん」

すると、向こうからお兄ちゃんがやって来た。

お兄ちゃん

「こんな時間まで帰ってこないから、探しに来てみれば、ほら、帰るぞ」  
なのは

「あ、ちよつと……」

いつの間にか辺りは真っ暗だ。お兄ちゃん達が心配になって探し

に来るのは当然。そのままお兄ちゃんはわたしの手を取り、引っ張っていく。

わたしは幽霊さんがいた場所を振り返り、幽霊さんの姿はもう見えない。結局名前は聞きそびれちゃった。

なのは

「ねえ、お兄ちゃん……」

お兄ちゃん

「ん、なんだ？」

なのは

「あのね、お家に帰ったら、お母さんやお兄ちゃん、お姉ちゃんに、いっぱいお話したいことがあるんだ」

うん、幽霊さんの言う通り、ちゃんと家族で話すよ。わたしが感じていること、わたしがなにをしたいのかを。

☆☆☆

〜一夏視点〜

一夏

「がんばれよ、【なのは】」

【なのは】があの子の兄さんに連れられて帰り、公園には俺が1人だけ。

こんな時間に子供がと思われるだろうが、こんな身体だ、誰かに見えることはないだろう。

一夏

「幽霊の姿こんな身体で誰かと話ができるなんてな」

幽霊の姿で誰の目にも留まらない姿で、正直心細く無かったと言われれば？だ。にもかかわらず、あの子とは話がすることができた。

それだけでも、少し気が紛れた。

一夏

【なのは】、ちゃんと家族と話ができただろうか？」

俺があの子のおかげで救われたように、【なのは】も救われてほしい。

一夏

「あ、なんだか、安心したら眠気が……」  
こんな身体でも、眠くなるんだな。だんだん、意識が……

・  
・  
・  
・

一夏

「ん、あれ、なんだここ？」

目を覚ますと、いきなりさつきまでいた公園から、全く何も無い空間で目を覚ました。

一夏

「え、あれ？俺の身体!?!」

さつきまでの半透明な幽霊の姿と違い、身体が完全に元に戻っている。

一夏

「さつきまで公園にいたはずだよな？つうか、ここどこだよ？」

右を向いても左を向いても果てしない空間が広がっているだけ。???

「ほお、こんな場所にワシ以外に訪れる者がいようとは」

一夏

「……ツ!?!?だ、誰だよ、あんた？」

いきなり俺の背後から声をかけられ振り返りながら距離を取る。???

「わしか？わしの名は、【ユン||カーファイ】。ただの散歩好きの老いぼれじゃ」

【ユン||カーファイ】と名乗ったその人物は、老人というにはあまりに若々しい容姿。そして何より……

一夏

(この人、かなりできる……)

一切の隙を感じさせない佇まいに、俺はそれ以上動くことができない

か  
つ  
た。  
T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e

## 第4話 『旅の始まり』

くくく 一夏視点くく

さつきまで幽霊のような姿だったはず。しかし次に目を覚ませば、普通に身体がある。だが周りは突然見知らぬ空間で、目の前には「ユン」カーフアイ」と名乗る老人。頭から被った外套で全身は見えないが、老人というには見た目や声はあまりにも若い。

一夏

「どうも、【織斑 一夏】です。それで、【ユン】さん。あんたは何者だ？そして、ここはいつたいたいどこなんだよ？それに、確か俺さつきまで身体が幽霊に……」

ユン

「そう一気に聞くな。言ったはずじゃ。ワシはただの散歩好きの老いぼれと。ホツホツホツ♪」

飄々とした立ち振る舞いだが、一切の隙を感じさせない。実力はそれこそ、俺が知る中で達人と呼べる、【千冬】姉や【柳韻】さん以上。いや、あの人たちとは比べ物にならないほどの強さの次元が違うくらいに。

ユン

「さて、この場所はそうさな、夢と現実の狭間。時間と空間を超越した世界。始まりと終わりの地。様々な呼び方はあるが、早い話、一切の概念から外れた場所じゃな」

一夏

「概念から外れた？」

「ここがどんな場所か教えてもらったが、ますますわからなくなる。

正直、いま自分が立つてる場所が上なのか下なのか。右なのか左なのかもわからない。かろうじて、【ユン】さんと向かい合っているおかげで話が出来ているくらいだ。でなければ、正直酔いそう。

ユン

「さよう。概念から外れている故、上下左右といった方向から時間の流れ。果ては生と死の概念すら外れているのじゃ。

じゃからワシもこの場所を長いこといる故、

軽く数千年以上は彷徨っているのお。まあ、時間の流れも無いから変な話じゃがの。

まあ、言うなれば、自分達が暮らす世界とは正反対の裏の世界。

本来世界は自分の暮らす世界とは別の世界が並んで存在している。いわゆる、並行世界があると言われてるのは知つとるか？」

一夏

「ええ、まあ……」

パラレルワールド。普通だったら信じられないが、現在自分がそれを経験しているのだから信じざる得ないのだから。

って、サラツと凄いこと言わなかったかこの人？

ユン

「そしてそれは、己の選択次第で無数に存在する。しかし、そんな世界が自分達のすぐ横にあるというのに、1つとして自分達はそんな世界があることを知らず、互いに干渉することはできない。それはなぜか？」

一夏

「言われてみれば……」

確かに。自分達のすぐ横に別の世界が存在するなんて言われても、普通だったら信じない。それは、その存在を誰も確認したことがないからだ。

ユン

「それは、互いの世界の狭間にこのような場所が壁のようにあるため、お互いに干渉することはおろか、普通の人間はこの場所自体訪れることはできず、その存在を知ることが本来的にのじゃ」

一夏

「なるほど。って、そもそもなんで俺がそんな場所にいるんだ？」

「ユン」さんのこの場所の説明を聞いて、話が振り出しに戻ってしまった。そもそも俺はさつきまで別の場所にいたのだ。ただ、幽霊みたいな姿だったが。

ユン

「まあ、普通ならの……しかし、例外もある。それは、己と世界との存在が不安定になると稀にその壁を越えてしまうことがあるのじゃ」

一夏

「自分と世界との存在が不安定になる？」

ユン

「そうさな、例えば世界そのものを揺らすほどの強い衝撃などが発生したとしよう。その際、衝撃を受けた者は、自分と自分がこの世界に存在するという定義が不安定となり、そのまま壁を飛び越える。稀にこの場所すらも飛び越えてしまう者もおるがの。」

して、少年は覚えはないかの？」

世界そのものを揺らすほどの強い衝撃。それを聞いて一番に連想したのは、あの時【アリシア】と俺が、【プレシア】さんの研究所から見たあの光を思い出す。

一夏

「じゃあ、俺が幽霊みたいな姿になってたのは……」

ユン

「おそらく、衝撃の中心近くにいたのじゃろう。強すぎる衝撃がお主からココロとカラダを分け、ココロが抜け出し彷徨っていたのが、カラダがこの場所に流れ着き、その後お主のカラダがココロをここまで引っ張ったのじゃろう」

つまり、一種の幽体離脱をしていたってことか。

ユン

「しかし、お主は運が良いの。こうしてココロとカラダが互いに引かれ合い、無事1つに戻ることができたのじゃからな。しかし、この娘は……」

一夏

「……!!!?」

【ユン】さんが外套から抱えていた人物が姿を見せる。

その人物を見た瞬間、俺は何も言葉が出なかった。

一夏



「【アリシア】!?？」

「【ユン】さんが抱えていた人物は、俺と同じようにあの光に巻き込まれた【アリシア】だったのだ。」

俺は慌てて「【ユン】さんから【アリシア】を引っ手繰り、呼び掛ける。」

一夏

「おい、【アリシア】!?？目を覚ましてくれ、【アリシア】!?？」

しかし、【アリシア】はどんなに揺すっても目を開くことがなかった。

ユン

「残念じゃが、その娘は……」

一夏

「そんな……」

目を覚まさない彼女の様子に、俺の脳裏に最悪の結果が過ぎる。

ユン

「すまん。少し意地の悪い言い方だったな。その娘はまだ命を失ってはおらん」

一夏

「は?どういふことだよ!?。現に【アリシア】は!?。変な冗談だったらあんだでも……」

【アリシア】が死んでいないと言う【ユン】さんの言葉に信じたい気持ちと信じられない気持ちとがせめぎ合う。その所為で俺も声を荒げた。

ユン

「その娘は、お主と同じカラダからココロが抜けておるのじゃ」

一夏

「な、なら、【アリシア】もそのうち目を……」

ユン

「じゃが、お主と違い、眼を覚ますことはないじゃろう」

一夏

「……へ?」

俺と同じようにカラダからココロが一時的に離れているのなら、いずれココロがカラダに戻ってくるはず。しかし、【ユン】さんは目覚めないと言う。

すると、【ユン】さんは【アリシア】に手をかざすと、彼女から光の帯が現れる。

一夏

「その光は？」

ユン

「この光は、この娘のココロの残滓カケラの残光じゃ。この娘はお主と同じようにカラダとココロが分かれたが、さらに衝撃にココロの方が耐え切れず砕け、散らばったのじゃろう。砕けたココロの残滓は弱々しく、助かる方法は、ココロの残滓を見つけ直接カラダに戻すしかない」

【アリシア】のココロの残滓の残光だという光の帯は4本。それは確かに、まるで水中を当てもなく漂うように、宙を揺らめくだけ。

ユン

「さらに、先も言ったように、この場所から外の世界は、数多の時間の流れ、選択によって生まれた世界が無数に存在する。そんなところから、たった一人の人間のココロの残滓を見つけるのは至難の道じゃぞ」

【アリシア】のココロの残滓を見つけるにしても、それがどこにあるのか見当もつかない。

それでも、俺は【アリシア】のココロを見つける。その覚悟は揺るがない。

すると、一本だけ光の帯が俺の元へと伸びてきた。

一夏

「え？な、なんだ？突然光が俺の方に？」

ユン

「お主、それは!?!今すぐそこに入れているものを出してみよ」

俺は言われるままに、光が当たっていた場所に入っているものを取り出す。

そこに入っていたのは、見たことのない青い宝石だ。こんなものい

つのまに？

一夏

「……っ!?」

俺は自分の手にある青い宝石を握りしめた瞬間、俺の中になにかが流れ込んできた。

プレシア

『ごめんね。今日も仕事で遅くなりそうなの。だから先にゴハン食べて、寝てていいからね』

アリシア

『うん！わかったよ、ママ！』

あれは、【アリシア】？電話の相手は、【プレシア】さんか。

プレシア

『いつも寂しい思いさせてごめんね』

アリシア

『うん。ママはお仕事なんだから、しっかりね』

プレシア

『ええ。じゃ、戸締り忘れないでね』

アリシア

『うん！』

そして、【アリシア】は電話を切る。

アリシア

『ママ……』

電話口では悟られないようにしていたようだが、通信を切った途端寂しさから目に涙を溜め、その声は震えていた。

一夏

「はっ…今は……」

ユン

「お主に見えたもの、それはおそらく、その石に込められたこの娘のココロの記憶じゃろう」

一夏

「ココロの記憶？」

我に返り、先程見た【アリシア】の記憶を思い返す。あの時見た【アリシア】の涙。それもそうだ。【アリシア】はまだ幼く、家族は【プレシア】さんのみ。寂しくないはずがない。それでも、母親に心配をかけまいと、必死で感情を押し殺して……

ユン

「珍しいものじゃ。その石は人のココロに反応し、ココロの一部を取り込むことで、手にした者に力を与えるのだろう。この娘の場合、ココロだけの存在故、そのままこの石に封じ込められておるのじゃ」

一夏

「つまり、この光の先に同じように、【アリシア】のココロが封じ込められた石があるってことなのか？」

ユン

「そう考えていいじゃろう」

【アリシア】の他のココロがどこにあるかわからないが、手がかりが全くゼロというわけじゃない。少し希望が見えてきた。

一夏

「でもなんでココロの1つが俺のところ？偶然、なのか？」

ユン

「この世に偶然など無い。あるのは、必然のみ」

一夏

「え……？」

ユン

「なに、いつだったか立ち寄った世界で、酒を飲み交わした者からの受け売りよ。もしかしたら、その娘がお主なら必ず自分を見つけてくれると信じ、引き寄せたのやもしれんな」

一夏

【アリシア】が……」

もしそうなら、【アリシア】のココロを必ず見つけ出す。それが俺が今やるべきことだ。

ユン

「さて、お主の目的も決まったところで、次はワシに付き合ってもらお

うかのおお？」

一夏

「へ………？」

ユン

「なあに、悪いようにはせん。ちとワシの遊び相手になるだけじゃ」

【ユン】さんの遊び相手という言葉に、俺は背中に嫌な汗を感じてしまふ。

ユン

「なにぶん数千年以上もこの世界を旅しているからのお。1年分くらいは退屈は晴らさせてもらうぞ。まあここでは時間の概念がない故、意味も無いがの」

一夏

「いや、ちよつと………！」

【ユン】さんはそのまま腰に佩<sup>はい</sup>た太刀に手をかける。

一夏

「俺、まだ心の準備が………！」

ユン

『《八葉一刀流》創始者、【ユン・カーファイ】参る！』

俺はその一瞬で、意識が飛んだ。

．．．．．  
いったいどれくらい時間が経ったのだろう。そして俺は何十、いや何千何万回くらい殺されかかったのだろうか？いやもしかしたら本当に死んでいたのかもしれない。

この場所が死の概念すら無いという【ユン】老師の言う通り、遊び相手という、一方的な死合を繰り返して、俺は何度も死を経験したのだ。俺が感じていたように、【ユン】老師の強さの次元は規格外。最初のうちは太刀を抜くことなく、ほとんど無手で瞬殺。それを数十回繰り返す。

返し、ようやく避けられるようになり、数百回くらいで相手の太刀を運良く奪えるようになった。

けどあの人、太刀に代わって煙管を刀代わりにまで使って来たのだ。

数千回くらい相手の技をくらい、おかげで基本の型は身体で覚えることができたが。

それでもこっちは一太刀も与えることは叶わず、数え切れないほどやられ続け、記憶が完全に飛んでいる。

ユン

「ほっほっほっ。ここまでやれば良いかの。まあ、小指の先分くらいは満足したわ」

ここまでしておいて、言うことはそれかよ。この鬼老師は。

俺は【ユン】老師から奪った太刀を杖代わりにヨロヨロと立ち上がる。

ユン

「じゃが、ワシが気まぐれで編み出した剣術を初伝まで身体で覚え込み、己がものとしたのじゃ。誇って良い。

よって、【織斑 一夏】！お主には、《八葉一刀流》初伝皆伝とする！

いずれ、お主も《理》に至ることを願っておるぞ」

【ユン】老師からの激励に胸が熱くなった。俺は太刀を【ユン】老師に返し、正面に向き直る。

一夏

【ユン】老師、大変お世話になりました！」

俺は【ユン】老師へと一礼。そして踵を返し、手に持つリボンを握りしめた。

さすがに意識の無い女の子を常に背負っているわけにもいかず、【ユン】老師の計らいで特殊な術を使い、【アリスア】のカラダを彼女が付けていたリボンに封じ込めたのだ。

俺はリボンから伸びた光に従って歩き出す。

伸びた光の先、希望を思わせるような眩い光が【一夏】の姿を包み

込む。

くくユン視点くく

ユン

「・・・行つたか……」

【二夏】の姿は光の向こうへと消えた。無事に着くことを祈る。

ユン

『八葉』は数多の強者を引き寄せる。じゃが、決して臆するな。

しかし、この地に入り、ワシが編み出した『八葉一刀流』を、初伝とはいえワシが直々に教えることができたのは、ワシの望みの一つが果たせたか」

いや、こればかりは忘れん、ワシの不肖の時代。己一人で強さを追い求めていたころ、ワシより強い者がいなくなり、弟子になりたいという者たちしか現れんようになった。そんな者達の願いすら断り続け、ついにはワシとは反対に、世界の全てを探求せんと、数多の叡智を積み重ねた友に頼み、まだ見ぬ強者を求め、並行世界を渡る絡繰を作らせ、数多の世界を渡り歩けるようにはなった。

しかし、ワシ自身がどの世界にも存在しない、世界の概念から外れた存在となってしまった故、世界そのものに存在することはできず、特定の弟子を取るということができなくなった。

まあ、転々とワシが残したものは残っているやもしれんが。

ユン

「いやあ、己の強さのみに執着した故の若かった軽率な行動だったか」つまり早い話が、【二夏】がワシが教えを授けた最初で最後の弟子じゃ。

ユン

「どうかあの者が歩む道に、幸多からんことを」

せめてワシができることは、弟子の無事を祈るだけじゃが。すると、どこからともなく鏗鳴りの音がした。

ユン

「んっほほ、これもまた縁というものかのお。ワシ以外ではてんでじゃじゃ馬じゃったのに。それとも、ワシに代わって【二夏】の道を

見守ってくれるとしても言うのか？」

見ると、「【一夏】に使わせていた太刀がワシの手から消えていたのだ。

ユン

「さて、ワシも気ままな散歩を続けるとするか？」

【ユン】は再び、当てのない旅を続けるのだった。

T o b e c o n t i n u d e



## 無印編

### 第5話 『俺は剣、きみは盾』

くく一夏視点くく

一夏

「ん……うつ……ここは？」

空からさす陽の光に目を覚ます。

俺はなぜか森の中で気を失っていたようだ。呼吸ができることから、ここは空気が存在していることはわかるが。

あの場所での出来事が夢幻と思えたが、「ユン」老師との死闘（※ほとんど一方的）の末、自分自身から漲ってくる力が、それが夢じやないとなんとなく思えた。

一夏

「ユン」老師と別れて、あの空間から出たと思えば、まさかこんなところに放り出されるとは。にしても、ここがどこなのかっていうのもあるが、この場所なんだか……」

辺りを見回しても人が通ってこれるような隙間も無いくらい森が広がっているが、なぜかこの場所にさす陽の光や周りの空気が、妙に神秘的に感じてしまう。

キーン！

一夏

「……？今の音は……」

すると、突然どこからか鏗鳴りのような透き通った音が響く。

俺は音のする方に導かれるまま、なんとか通れるくらいの細道を縫うように進む。

道を抜けると、そこはひらけた空間。道はそこで終わっていた。

ただ1つあったのは、石を積み重ねたお墓と思しきものだけ。

その台座の部分になにかが置かれているように見える。

一夏

「これは……」

俺は墓のもとまで行く。墓には名前は彫られていないため、誰の墓かはわからない。しかし、台座に置かれているものには見覚えがあった。それは、あの場所で「ユン」老師との修行にて、俺が使わせてもらっていた太刀だ。

その太刀を手に取り、鞘から抜く。やっぱり、ただのそつくりな造の太刀ではない。あの時の修行でもそうだったが、ものすごく手に馴染む。

なぜこの太刀がここにあるのかはわからないが、もしかしたら老師からの配慮なのか。

――……………

一夏

「＼＼＼もに＼＼＼か……………」

そうこの太刀から聞こえた気がした。とりあえず、太刀を腰に差し、墓に対し一礼し拝む。

すると、いつの間にか向こうに別の道が現れており、俺はその道を進んでいく。

一夏

「なんだよ、ここってどつかの町の裏山だったのか」

森を抜けると、すぐそこは山の登山道へと続いていた。人がいるのがわかるように、元々レジャーも兼ねた山なのか、しっかりと道もある程度舗装がされている。

俺がいた森から、てつきりどこかの山奥くらいと思っていたが、下の方に町が広がっているのが見えた。

一夏

「…………やべえ、人が来た……………」

すると、こちらに複数の人が来た気配を感じ、物陰へと隠れ、息を潜める。

この場合、その人達に保護をもらうのが一番だと思うが、現在の俺の状況。

○見た目子供

○住所不定

○銃刀法違反

おまけに、向こうと言葉が通じるかも不明。仮に言葉が通じたとしても、状況を説明したとして、十中八九この子供の姿なりだ。よくて病院。最悪、警察行きだろう。

とりあえず今は、遠目からでも、出来るだけ多くの情報を得なくては。

???

「・・・ん？」

???

「どうかしたの？」

???

「いや、人の気配がしたと思ったが、気のせいみたいだ」

どうやら向こうから来るのは、男女の2人組。話している言葉は日本語みたいだ。登山客のようだが、2人とも相当な手練れ。それに、男の方は一瞬だがこちらの気配に気づいたみたいだし。

登山客（女）

「そういえば、今回も例の場所を探してたわけ、【恭】ちゃん？」

登山客（恭ちゃん）

「当たり前だ。名前などの記録こそ少ないが、過去に数々の伝説を打ち立て、《剣仙》と呼ばれるまでに至った方を祀った祠がこの山のどこかにあるはず。俺も、剣士の端くれとして、一度はこの目で確かめたいからな」

登山客（女）

「でも、そんなすごい人を祀った場所が、本当にこの町のこんな山にあるとは思えないけどねえ」

そう言つて2人はそのまま下山していく。それにしても、さつき【恭】ちゃんと呼ばれた男が話していた、《剣仙》と呼ばれた人を祀った祠。

それを聞いて、すぐに先ほど俺が出てきた道を振り返る。

しかし、そこには最初から道など無かったかのように、岩壁が道を消していた。

一夏

「ははは……消えちやつたよ……」

あの謎空間といい、もう不思議体験は俺としてはもう十分。深く考  
えるのはやめよう。

一夏

「とりあえず、今日の寝床を探すか」

いつの間にか、周りは陽の光は夕陽を思わせる橙色。今日のところ  
は町に出るよりも寝床を見つけて、情報を探るのは明日にしよう。

そう考え、寝床を探すために森の中を進む。

幸いなことに、もともとこの山はキャンプ場も兼ねていたためか、  
中腹くらいの場所ですぐに寝床は見つかった。

一夏

「今のところ、反応はないか」

現在は焚火で照らしながら、片手にある石に目をやる。

【アリシア】のココロの残滓の一つが封じ込められた宝石。

あれ以降、ほかの残滓への反応は見られない。

一夏

「やっぱり、ある程度近くにいないと反応しないのか。まあ、地道に探  
していくしか方法はないか」

宝石を弄びながら、今後の方針を考える。

一夏

「その前に……」

焚火から火かき棒代わりに使っていた枝を抜くと、あらぬ方向へと  
投げ放つ。

???

「うわっ!??!」

すると、枝を投げた方から叫び声上がる。

一夏

「出てこいよ。ま、もし敵対するってんなら、こっちも……」

傍らに置いていた太刀の鍔に指をかけ、向こうを脅す。

そして、少しして草むらから、一人の金髪の少年が現れた。

登山客というには格好が特殊な、どこかの民族衣装のような出で立ちだ。

???

「で、出ます！出ますから！あ、あの、こちらに敵対する意思はありません。なので、刃を収めてもらえませんか？」

一夏

「ふん。で、お前は何者だ？なんでこっちを覗いてた？」

???

「えーと、僕の名前は、『ユーノ・スクライア』。ある物を追って地球にやって来ました」

一夏

「あつさり名乗るのな。俺の名は、『織斑 一夏』。一つ聞くんが、ここは地球なのか？」

ユーノ

「はい、そうですが。それがなにか？」

今俺がいるここが地球とは。あの時の登山客が日本語を話していたってことは、日本である可能性が高い。

でもまさか、こんな形で戻ってこれるとは。しかし、ここが日本のどこなのかもわからない状態で、調べられる手立てもない。

それに今の俺の目的は、『アリシア』を元に戻すことだ。

一夏

「いや、なんでも。つうか、そんなに固くならなくていいぞ。さつきは手荒な真似をして悪かったな。俺のことは気軽に『一夏』って呼んでくれ。それで、もう一つ質問するが、お前の口ぶりからすると、『ユーノ』は地球以外の場所から来たみたいだに聞こえるんだが？」

ユーノ

「えーとそうだなあ、こことは別の世界って言えばいいのかな。

僕はそこの、『ミッドチルダ』という世界から来たんだ」

一夏

「待て『ユーノ』、今お前、『ミッドチルダ』から来たって言ったか？」

ユーノ

「うん、そうだけど……」

「【ユーノ】が嘘を言っている可能性もあると考えたが、自分がいた世界と同じ名前を咄嗟に出すとは思えないため、【ユーノ】が本当のことを話しているのを前提で、俺はこちらの身の上を話す。」

聞けば、【ユーノ】はスクライア族という、様々な世界の遺跡発掘を主に生業とした一族らしく、そこで発掘した物を《時空管理局》に保護してもらおうように手配していた矢先、輸送船の事故でそれが暴走し、地球へと散らばったらしい。

一夏

「んで、【ユーノ】はそれを追って地球に来たってことか。なんでまた1人で？ 《管理局》に依頼とかしなかったのか？」

ユーノ

「たぶん、してくれていると思うよ……」

一夏

「思う？」

「【ユーノ】の話によると、事故後に発掘の依頼主より、それを発掘責任者として先に地球へと先行し、発掘物を確保せよ。《管理局》にはこちらから連絡する。以後の処置はこちらに任せよ。とのことだが、遠回しに《管理局》に連絡するとか、早い話が、

『おいこら、こつちが依頼した物を落つことすとは、どおしてくれるんだ、ああ？ 落し前として、テメエが直接行って回収してこい。警察とかにチクツたらどうなるかわかるよなあ？』

なんだかヤ○ザのような言い回しだ。俺には完全に裏があるようにしか思えないんだが。

一夏

「俺から一応忠告するが、【ユーノ】の方から早めに《管理局》に連絡入れといた方が良さぞ」

ユーノ

「え？ でも、向こうが連絡しておいてくれるって……」

それに、それを発掘した人物として、魔法文化のない地球で、もしそれが発動なんてしたらえらい騒ぎになるからね」

「ユーノ」、責任感があるのはいいが、いくらなんでも人を信用しすぎだつて。

一夏

「いいから、連絡しておけよ。いいな？」

ユーノ

「う、うん……」

一夏

「んで、話は戻るが、お前が探しにきたつていう、発掘物つてどんなだ？」

ユーノ

「えーと、これだよ」

ユーノが取り出した赤い宝石から映像を見せる。

一夏

「え？これつて、こいつと……」

色合いは微妙に違うが、その形は俺の持つ【アリシア】のココロの残滓とよく似ている気が……

ユーノ

「ちよ、それ！それだよ！それを早くこつちに！」

一夏

「うわっ！待ってくれ！まずはこつちの話を……」

【ユーノ】は飛びかからんばかりに、【アリシア】の残滓を奪おうとするのを必死で止める。

一夏

「はあはあ、まずは、こつちの話を聞いてくれ……」

ユーノ

「ご、ごめん、僕も気が動転して……」

【ユーノ】が発掘し、地球に散らばり、わざわざ回収しに来たものは莫大な魔力が内包されており、下手に触れようものなら、魔力の素養がない人物が持つても些細なことで発動。発動者の願望を歪んだかたちで実現。それも、そのほとんどが暴走する結果を招く代物らし

い。

ユーノ

「だから、見つけたらすぐに封印しなくちゃいけないんだ。きみの持っているそれも、すぐに封印の処理をしなくちゃ」

一夏

「悪いが、こっちも事情があつて渡すわけにはいかない。その代わりに、俺の知っている情報を話すからさ」

「ユーノ」に一旦「アリシア」の残滓を見せ、「ユン」老師から教えてもらった残滓のことを話す。

ユーノ

「なるほど、持ち主のココロの一部を取り込み、チカラを増幅させる。そして、「一夏」の持っていた《ジュエルシード》には、きみの追っている人物のココロの一部が封じられていると。でも驚いた、これを見る限り、封印されてないにも関わらずチカラが安定している。これなら暴走する危険性は無さそうだね。はいこれ、返すよ」

一夏

「わかってくれたようで何よりだ。サンキュー」

「ユーノ」はすぐにこちらの話を信じてくれた。思ったが、すんなり俺に返してくれたことといい、「ユーノ」は責任感は強いが、純粹に人を信じやすいところがある。だから、今回の《ジュエルシード》捜索だって、体良く押し付けられたといったところだろうな。

一夏

「さて、「ユーノ」」

ユーノ

「なんだい、「一夏」？」

一夏

「お前のその《ジュエルシード》捜索、俺にも手伝わせてくれないか？」

ユーノ

「え？そんな、これは僕がやるべきことで、関係の無いきみを巻き込むなんて……」

一夏



「お前をこのまま放っておくと、むしろ俺の方が目覚めが悪くなる。

ま、探す物は同じみたいだし、手を貸すよ」

こいつの性格じゃ、仮に《ジュエルシード》を全て集めきれたとして、その先方に引き渡した途端、向こうに手柄を丸々横取りされる可能性だってある。悪ければ、気づかないうちに犯罪の片棒を担がされるかもしれない。さらに悪ければ、今回の件の全責任を背負わされた挙句、口封じとか……

ユーノ

「ありがとう、きみが協力してくれるなら、とつても心強いよ、【一夏】」

一夏

「こつちこそ、しばらくの間よろしくな」

お互いに硬く握手を交わす。

一夏

「そういえば、さつき【ユーノ】が使ってた、あの赤い宝石みたいなもので、あれってデバイスなのか？」

ユーノ

「うん。まあ、使えてるってだけで、使いこなしているとはいえないけどね」

一夏

「それでも、俺としては羨ましいけどな。俺には魔力の素養もないから使えもしないけど」

ユーノ

「え？何言ってるのさ。【一夏】にも魔力があるじゃないか。それに、きみが腕につけている物だってデバイスだよ」

一夏

「は？なに言ってるんだよ。俺に魔力があるだって？こつちはいままでそんなものとは無縁だったんだぞ。まあ、こいつプレスレットに関しては、俺が知らないうちに持っていた物らしくって、出所は俺もわからん」

いきなり【ユーノ】にそう言われ、俺自身が一番驚く。

それに、俺が腕につけているプレスレットがデバイスだと。

【ユーノ】にプレスレットを見せながら、これを得た経緯を思い出す。

これは俺が【プレシア】さんから保護された時に、俺が知らないうちに最初から持っていたものらしく、その後はお守り代わりにつけていただけだ。

ユーノ

「うーん、でも、魔力に関してはすぐにわかるよ。試しに《リンカーコア》を見せて。イメージはそうだな、自分の中心にちからを集める感じかな」

一夏

「いきなりそう言われてもな。さつきも言ったように、魔法なんか無縁だったからいきなり言われてできるもんでも……現に、なかなか集まらないぞ。なんつうか、所々塞ぎ止められているような感じだな」

ユーノ

「ははは、まあ、最初のうちはそんなものさ」

【ユーノ】は軽く言うが本当に難しい。しかし、【ユーノ】の言った通りに、ちからを真ん中に集めるイメージをすると、俺の胸の中心に白銀色の光が浮かび上がる。

一夏

「嘘だろ。まさか、本当に俺に魔力が……」

ユーノ

「うん。魔力総量を見る限り、【一夏】の魔力量は大体、一般魔導士の平均より少し上ってくらいだね。デバイスが使えればいいんだけど、これに関しては起動しようにも残念ながらこちらからの反応がない。詳しい専門家に見せないとわからないな」

デバイスに関してはすぐに使えることはできないようだ。その後、【ユーノ】からいくつか魔法を教えてもらうことができた。いくつか失敗したのもあったが……

???

(ヴオオオオオオー!!)

一夏

「なんだ!?!?」

突然異様な気配を感じると、獣のような唸り声が周囲に響き渡る。

ユーノ

「まさか、これは！」

「ユーノ」は声の主の正体に気づき、すぐに結界魔法を発動。

ユーノ

「【一夏】、構えて。来るよ！」

一夏

「おう！」

俺は太刀を抜き、気配がした方に身構える。

すると、周囲の木々をなぎ倒しながら現れたのは、なまじ生物を模したような、不気味に光る赤い目。手足の無い身体からは触手を蠢かせている、黒いどろどろとした塊。

一夏

「なんだよ、アレ？」

ユーノ

「気をつけて、アレは暴走した《ジュエルシード》から現れた思念体だよ。アレは倒すには魔力を通した攻撃で封印するしか方法はない」

一夏

「簡単に言うが、そう簡単に封印されてくれるたまじゃないだろう？」

物理攻撃は効かず封印するしか方法がないらしいが、向こうは完全に俺たちを獲物として捉えているようで、簡単にいかないだろう。

ユーノ

「ところで【一夏】、実戦経験は？」

一夏

「こういった実戦はこれが初めてだ。けど、不思議と恐怖は感じない」あの師匠との死闘を経験したからか、思い出せば、技を教えてもらうことはなく、老師の技を何千、何万発もくらって、身体に直接覚え込まされた。

おかげで、《八葉一刀流》を体得することができたが。

それと同時に……

一夏

「生半可なことじゃ倒れない打たれ強さと、簡単に折れないくらいの

凶太い精神は、嫌でも付いた！」

戦う覚悟は充分。やるしかないなら、全力でやるだけだ。

思念体

(ヴオオオオオオオオー！)

先に仕掛けてきたのは、思念体。その巨体をバネのように、上から2人を飲み込まんとして口を開けながら飛びかかる。

一夏

「ハアツ！」

【一夏】と【ユーノ】は左右に避けると、【一夏】は太刀を一閃。思念体は避ける暇なく身体を前後を両断される。

ユーノ

「まだだ！」

が、【ユーノ】が叫ぶ。瞬間に両断された思念体は何事もなかったかのように、【一夏】に向かって触手を伸ばす。

一夏

「チイ！キリがないな」

ユーノ

「危ない！」

【一夏】も触手を斬り払うが、思念体の触手も斬った先から次々と回復していく。

【ユーノ】もまた、【一夏】へと届きそうな攻撃を防御魔法等で援護をする。

一夏

「サンキュ、【ユーノ】」

ユーノ

「ダメだ！普通の攻撃じゃすぐに回復する。コレで封印しないと」

一夏

「わかってる・よっ！でも、コイツ執拗に俺ばかり狙ってないか？」

太刀で斬っているが、魔力上手く操りきれない攻撃では、斬った先から回復していく。【ユーノ】も魔法で攻撃を仕掛けているが、思念体は一切目もくれないことなく、【一夏】にだけ攻撃を仕掛けている。

ユーノ

「おそろく、【一夏】の持つてる《ジュエルシード》の魔力に惹かれて  
いるんだと思う」

一夏

「くそつ、俺はネギを背負った鴨かよ」

思念体が狙っているのは、普通の《ジュエルシード》よりも純度の  
高い魔力を有しているらしい、【一夏】の持つ「アリスア」の残滓。

思念体もその魔力を嗅ぎつけ、【一夏】達を発見したのだ。

まさに、好物を目の前に置かれた猛獣のように、思念体は【一夏】だ  
けを襲う。

2人とも思念体に遅れをとっているわけではないが、つい先ほど自  
分に魔力があるとわかったばかりで、魔法をまともに操れない【一  
夏】。魔法を使いこなすことはできるが、決定的な攻撃力を持たない  
【ユーノ】。このままじゃジリ貧となってしまう。

ましてや、現在【一夏】と【ユーノ】がいる場所は山の中とはいえ  
麓近く。もしここで2人ともやられてしまえば、思念体は町にまで降  
りていきかねない。

一夏

「【ユーノ】、上の方まで場所を変えるぞ！援護頼む！」

ユーノ

「わかった！」

2人は思念体を引きつけながら、山の中を木々の間を縫いながら駆  
け上がる。思念体も周囲のものをなぎ倒しながら、【一夏】を見失うま  
いと追いかけていく。

途中で逸れたのか、【一夏】1人がたどり着いたのは崖の間に架けら  
れた吊橋。そう簡単に落ちるような作りではないが、人が1人通れる  
くらいの幅だ。

【一夏】はその橋を渡っていく。が、橋の中間に差し掛かったところ  
で、思念体は上から身体を伸ばし、【一夏】の前に回り込む。

思念体

(ヴォルルル♪)

思念体は獲物を追い詰めたど、現すように唸り声をあげる。

しかし、

一夏

「ここなら……」

【一夏】の目に諦めの色は浮かんでいない。

一夏

「ユーノ、いまだ!」

ユーノ

「任せて!」

橋の入り口から、遅れて【ユーノ】が現れ、思念体を結界で閉じ込める。

思念体

(ヴオオオ!??ヴオオオオオオ!)

ユーノ

「グウウ……【一夏】、急いで!」

突然のことに、思念体は結界を破ろうと、雄叫びをあげながら体当たりを繰り返す。

【ユーノ】も堪えながら結界を貼り続ける。

一夏

「《八葉一刀流・四の型・紅葉切り》!」

【ユーノ】は同時に結界を解除すると、【一夏】は太刀を鞘に納め、居合の構えから思念体とすれ違いざまに抜刀。渾身の魔力を込め、連続斬りを放つ。思念体は切り刻まれ、その中心に青く輝く石、《ジュエルシールド》が現れる。

一夏

「いまだ【ユーノ】、封印を!」

ユーノ

「わかった。《ジュエルシールド》封印!」

【ユーノ】がデバイスを《ジュエルシールド》の前に翳しすと石は吸い込まれる。無事《ジュエルシールド》を封印することができた。

一夏

「おつかれ、【ユーノ】」

ユーノ

「そっちこそ」

【一夏】は太刀を鞘に納め、【ユーノ】と合流しようと橋を渡る。

戦闘が無事終了したと、【一夏】は完全に気を抜いていた。

その瞬間、闇の中から触手が【一夏】へと伸び、彼の武器を叩き落とすと、その身体を雁字搦めにされる。

一夏

「なんだこいつ?!?!」

ユーノ

「そんな、まだ生き残りが?!?!いや違う、《ジュエルシード》の反応がない?!?!」

先ほど相手をしていた思念体と同種。しかし、その身体は先ほどのものよりも一回り小さく、今にも崩れ落ちそうなほど不安定なものだ。【ユーノ】が反応を探るが、肝心の《ジュエルシード》が見当たらない。

一夏

「まさかこいつ、さつき切った……」

ユーノ

「そんな、《ジュエルシード》は取り除いたはずなのに?!?!」

その思念体は【一夏】が最初に両断した半身だと予想。【ユーノ】は信じられない様子だが、あの時思念体は【一夏】に両断された瞬間、その半身をそのまま潜ませ、【一夏】の《ジュエルシード》を奪う機会を伺っていたのだ。

思念体

(ヴォオオオ……オオオオオオ)

思念体の半身は必死に【一夏】に触手を伸ばし、締め付けていく。

一夏

「グワアアア！締め付けが……」

ユーノ

「まさか、直接【一夏】の持つ石からチカラを?!?!」

思念体は【一夏】に直に取りつき、彼の持つ【アリシア】の残滓の《ジュエルシールド》から魔力を吸収しチカラを強めているのだ。

一夏

「ガアアアア！」

ユーノ

「コノオ！【一夏】を離せ！」

【ユーノ】は【一夏】を助けようとするが、思念体は触手一本で払い飛ばす。

ユーノ

「アグッ！」

一夏

「【ユーノ】……無茶……するな……」

触手が身体に巻き付いた状態ながらも【ユーノ】を気遣うが、触手はどんどん身体を覆い、締め付けは強くなっていく。

一夏

「コノオ、このまま……奪われて……たまるか……」

武器もなく、身動き一つ取れない状態で、【一夏】は今取れる行動を考え、唯一動く足で橋の欄干まで走っていき、自らその身を投げ出す。

思念体にむぎむぎ【アリシア】の残滓を奪われるくらいなら、思念体もろとも橋の下へと落ちようと考えたのだ。

落下の衝撃で思念体の拘束が緩んだが、このまま自由落下していく。

ユーノ

【一夏】「!?？」

【一夏】がとった突然の行動に、【ユーノ】は慌てて駆け出し、半身を持ち出し、【一夏】の手を掴む。

なんとか引き上げようと試みるが、【ユーノ】の力ではこれ以上上がることはできない。

加えて、いまだに【一夏】の身体を思念体が纏わりついているため、徐々に【ユーノ】も橋の外へと滑り出していく。

このままいけば、【ユーノ】も橋の下へ落ちてしまう。



一夏

「【ユーノ】……」

すると、【一夏】が徐に【ユーノ】の名を呼ぶ。その表情は、ただただ【ユーノ】に対し、申し訳なきそうにしていた。

一夏

「ごめんな。協力するって言うっておきながら、こんなかたちで途中で止めちゃって……」

ユーノ

「なにを……言ってる……」

そして、【一夏】は躊躇することなく、【ユーノ】から手を離す。【ユーノ】だけで【一夏】のことを支えていられるわけもなく、【一夏】の手は【ユーノ】から滑り落ちる。

ユーノ

「!!?!」

【ユーノ】は再び手を伸ばし掴もうとするが、その手は虚しく空を切る。

【一夏】の姿はそのまま暗く広がる谷底へと消えていく。

ユーノ

「【一夏】……」

必死で彼の名を呼ぶが、返ってくるはずもなく、谷底に溶けるだけだった。

くくユーノ視点くく

どうしてこうなったんだ。

僕がアレを地球に運んできてしまったからか。

どうして彼がこんな目にあっただ。

彼は僕に協力してくれると、手を差し伸べてくれただけなのに。

どうしてこんな結果になったんだ。

ユーノ

「僕が……巻き込んでしまったから……」

彼の言葉に甘えてしまい、僕が彼を巻き込んだから。

こうなってしまったのも、すべて僕が招いてしまった結果だ。

彼は今回のことに全く関係なかった。ただ彼は力魔力があっただけ。それだけなのに、僕は彼を巻き込んで、結果……

ユーノ

「まだだ！すぐに追いかければ、まだ間に合うかもしれない！」

一縷の希望を願って、彼のもとへ追いかけようと身体を動かす。

ユーノ

「あ……れ？身体……が……」

魔力が底をついた所為か、自分の意思とは裏腹に、身体に力が入らず、崩れ落ちる。

ユーノ

「そんな……追いかけてなくちゃ……僕の……友……達……を……」

そのまま地面に倒れ込み、意識は闇に沈んでいく。

その夜、とある町では

???

「……んー……なんか……変な夢……」

謎の夢で目を覚ます少女がいた。

物語が動き出す。

T o b e c o n t i n u e

## 第6話 『チカラを持つ少女』

それは何気ない朝の一幕。

〜???視点〜

少女

「おはよー」

母親

「あら、おはよう」

父親

「おはよう」

リビングに入ると、先に起きて朝食の準備をしていたお母さんの【高町 桃子】さんと、テーブルで新聞を読んでいたお父さんの【士郎】さんへと朝の挨拶をする。

少女

「お母さん、わたしも手伝うよ。お皿並べれば良い？」

桃子

「ええ、ありがとう、【なのは】」

士郎

「ははは……本当に【なのは】はいろいろとしてくれて、自慢の娘だなあ」

そしてわたし、【高町 なのは】。5人家族の末っ子の、《聖祥学園》に通う小学三年生なの。

小さい頃にお父さんが大怪我をして入院して家族全員大変だったけど、わたしもお母さん達に言いたいことを言って、わたしも一緒に頑張ることができて、無事にお父さんも退院して、その後もいっぱい家族とおはなしする機会が増えたおかげで、今でも仲良し家族です。それもこれも、あの日の出会いのおかげでわたしは変わることができたの。

桃子

「ん？…どうかしたの？朝から元気がないみたいだけど？」

なのは

「あ……うん……なんか変な夢見ちゃって」

士郎

「ほお、どんな夢だ？」

顔に出てたみたいでお母さんからそう心配され、わたしは昨日の夜に見た夢、見覚えのある森で、知らない子がなにかと戦っていたという内容を2人に話す。

桃子

「へーそれは確かに変な夢ねえ。その夢に出てきた子って、本当に【なのは】の知らない子？」

なのは

「うん……ぜんぜん」

士郎

「にしても、場所は森か。そういえば、さつきニュースで裏山でなにか事件があったみたいだなあ」

なのは

「裏山って、うちの学校の？って、そこって、昨日お兄ちゃんとお姉ちゃんが行ってきたんじゃないかかったけ？」

桃子

「ええ。でも無事に帰ってきたわよ。今も道場で朝練中のはずだから、ついでに呼んできてくれる？」

なのは

「はい」

わたしは道場で鍛錬している、お兄ちゃんとお姉ちゃんを呼びに行く。

なのは

「お兄ちゃん、お姉ちゃん、おはよー。朝ご飯だよー」

お兄ちゃん

「おはよう」

お姉ちゃん

「あ、【なのは】、おはよー」

お兄ちゃんの、【恭也】さん。大学一年生。お姉ちゃんの、【美由希】

さん。高校二年生。2人とも《小太刀二刀御神流<sup>ごしんりゅう</sup>》っていう立派な剣術家でお兄ちゃんはお姉ちゃんのお師匠様なの。

恭也

「じゃあ【美由希】、今朝はここまでだ」

美由希

「はい、続きは学校から帰ってからね。じゃ行こっか、【なのは】  
なのは

「うん」

稽古を終えたお兄ちゃん達は朝食を食べに家へと戻る。その後ろをわたしも付いて行く。

恭也

「ほお、あの場所でそんな事件が」

美由希

「私も驚きだよ。私と【恭】ちゃんが下山した時は何事もなかったから、少なくとも、夜に何かあったんだろうね」

なのは

「でも、お兄ちゃんとお姉ちゃん達が無事でなによりだよ」

恭也

「なんだ、心配してくれたのか？ありがとう」

美由希

「ありがとー！【なのは】ー！ー！」

なのは

「うにや<sup>り</sup>!?? 苦しいってばお姉ちゃん」

もう、お姉ちゃんたらすぐにこうやって抱きついてきて。

でも、その事件が夜に起こったかもしれないんだ。そういえば、あの夢も夜だったなあ。

なのは

「あ、そうだお母さん、アレ用意しておいてくれた？」

桃子

「ええ、はいこれ」

わたしは朝食を食べ終わり、学校へ行く準備をしながら、お母さん

にそういつて用意してもらったのは、1束の花束。

なのは

「じゃあ、わたしも学校に行つてきまーす!」

桃子

「ええ、いつてらっしゃい、【なのは】」

家族

「「いつてらっしゃい」」

わたしは花束を持って、家を出た。

さてと、学校に行く前にあの場所へと向かう。

【なのは】を見送った後、リビングに残っていた家族達は、自分達の胸の内を語る。

士郎

「にしても、【なのは】はすっかり変わったね」

恭也

「ああ、特に父さんが入院した時は、忙しさにかまけてた所為で、子供ながら無意識にどこか抑えつけさせてしまっていたが」

美由希

「うん。お父さんが無事退院できたってのもあるけど、あの大人しかった【なのは】が、あの時私達に自分の感じていることをはっきりと言ってくれたおかげで、今もこうしていられるんだよね」

家族達は、ここ数年で【なのは】の大きな心境の変化をしみじみと感じていた。

士郎

「そういえば毎年、【なのは】が花束を持って行くことがあるよな?あれって学校に飾るために持つて行つてるんだよね?」

桃子

「あら、相手に花をおくる理由なんて、一つしか無いんじゃないかしら?」

毎年【なのは】が同じ日になると花束を持って行っていることを、

【士郎】が疑問に感じ理由を聞く。

ただ【桃子】だけは知っているのか、少々言葉をぼかしながら、わ

ざとらしく口に手を当てる。

恭也

「なっ!? ま、まさか、【なのは】に男だと!? いかんぞ! 俺の目の黒いうちは、【なのは】に悪い虫など近づけせんからな!」

美由希

「うそ! 【なのは】に彼氏!? えー誰だれ? 私達が知ってる子なの? 【なのは】の周りにいる男の子って……いや、アレは無いか……」

士郎

「ふ……ふふ……本当にそうなら、僕が直々に【なのは】にふさわしいか見極めないといけないかな?」

【なのは】に恋人ができたのかと、家族達は様々な反応を見せる。父親と兄の2名は、やや物騒な反応示すが。

桃子

「もう、【恭也】も【士郎】さんも、少しは頭を冷やさない。でも、【なのは】のことをあそこまで変えてくれた子よ。きつと、悪い子じゃないわ」

【桃子】は【なのは】の行った方を、温かい眼差しを向けていた。

……なのは視点……

なのは

「~~~~♪~~~~♪」

【なのは】は学校へ向かう途中、母親から渡された花束を持って鼻歌を歌いながらある場合へと向かう。

これは、わたしのお父さんが大怪我で入院したときに出会ってから、毎年欠かすことなくしていることだ。

パッパッー!

なのは

「んにゃ?」

突然車のクラクションの音がしたと思えば、わたしの横にお金持ちの人が乗るような派手なリズムシンが停まる。

なのは

「ウウ……」

そのリムジンの窓が開き、現れた顔を見た途端さつきまでの気分が一気に落ち込む。

少年の声

「やあ【なのは】。朝からきみに出会えるとは、この【征騎 セイキ 王士 オウジ】の日頃の行いの賜物というやつかな?」

朝から嫌なのに会ったの。【征騎 王士】くん。先が金髪のメツシユの入った赤毛に小学生と思えないような顔立ちはいい方だと思う男の子。絵に描いたような金持ちで、わたしの入学初日にいきなり嫁になれなんて言ってきた変な子なの。

王士

「こんなところでなんだ、さあ乗りたまえ。嫁の1人であるきみは大歓迎だ」

なのは

「つつしんで遠慮するの。わたし行くところがあるから」とりあえずこう言ったが、潔く引き下がってくれればいいけど。さてここからどう抜け出さばいいかな。

取り巻き1

「おい、【高町】! 【王士】さんがこう言ってくれているのにその物言いはなんだ!?!?」

取り巻き2

「そうだそうだ! 【王士】さんの嫁なら大人しく従え!」

リムジンには【征騎】の取り巻きの連中も乗っていたようで、【なのは】に車に乗るようにまくし立てる。

王士

「おいおいお前ら、そんな風に言うもんじゃない。彼女はきつと照れてるだけなのだから。おや、その手に持っているのはもしや僕へのプレゼントかな? ありがたく受け取ろう」

【征騎】は目敏く、【なのは】の持っていた花束を目敏く見つけると、自分へのプレゼントだと勝手に思い込む。

なのは

「やめて、違うの! これはあなたへのプレゼントじゃないから!」



花束に手を伸ばす【征騎】に、【なのは】も必死で抵抗。

取り巻き1

「おいー！【王士】さんがよこせと言っているんだ！とつとと差し出せー！」

取り巻き2

「お前は黙って従え！」

そこに取り巻きも加わり、花束を奪いにかかる。

なのは

「やめて！取らないで！これは……」

向こうの勢いにすっかり押され、【なのは】は涙ぐむ。

少女の声

「コラー！ー！あんた達！ー！【なのは】になにやってんの！？」

取り巻き

「へ？ブベツ！？」

突然少女の叫び声が聞こえたかと思えば、取り巻きの1人が蹴り飛ばされた。

なのは

「ア、【アリサ】ちゃん？」

いきなり取り巻きの子にキックをしたのは、わたしのお友達の1人の、【アリサ・バニングス】ちゃん。

少女の声

「【なのは】ちゃん、大丈夫？」

なのは

「【すずか】ちゃん。うん、大丈夫だよ」

そして、【アリサ】ちゃんに続いて、わたしに駆け寄ってきたのはもう1人の友達、【月村 すずか】ちゃんだ。

アリサ

「あんた達、【なのは】にこれ以上手を出すってんなら、容赦しないわよっー！」

王士

「酷いことってなんだい？僕は、【なのは】が照れて僕へのプレゼント

を渡せずにいたから、後押しを……」

だからわたしは照れてなんかいないのに。まだコレが自分へのプレゼントだなんて思ってる。

アリサ

「これのどっこが照れてるって言うのよ！」

すずか

「うん。明らかにやりすぎだよな？」

2人は【なのは】に代わって、【征騎】達に怒りをぶつける。

王士

「いやいやすまない。僕が【なのは】だけに構ってしまったから2人はそんなに怒っているんだね。安心してくれ、【アリサ】も【すずか】も俺の大事な嫁。決して蔑ろにするようなことはしないよ」

取り巻き

「そうだ！【王士】さんは誰も平等に愛すると言ってくれてるんだ！お前たちは黙ってその愛を受け入れればいいんだよ！」

2人がこんなに怒っていても、やっぱり当の本人は見当違いの受け取り。取り巻きもそれに増長する。

アリサ

「あんたらね……」

すずか

【アリサ】ちゃん、これ以上は無意味だと思うよ」

【アリサ】ちゃんと【すずか】ちゃんがこんなに怒っていても、【征騎】くんの反応に、2人は諦めモード。かくいうわたしもこれがまだ続くと思うと……

すずか

「そもそも【征騎】くん、こんな道の真ん中に車停めたままじゃ他の人達に迷惑だよ？ 続きは学校でね？」

【すずか】ちゃん、ナイスアシスト。見ると、【征騎】くんの車の後

ろに何台も車が停まってクラクションを鳴らしていた。

王士

「む？ちっ！僕の嫁達の憩いの時間を邪魔しおって！まあ、ここは【す

ずか」のいう通りにしよう。それでは嫁達よ、また学校でね」

【征騎】くんとその取り巻きくん達は車に乗り込み、ようやく行つてくれた。

なのは

「ふう、ありがとう、【アリサ】ちゃん、【すずか】ちゃん」

アリサ

「別に、あんたこそ大丈夫だったの？」

なのは

「うん。コレも取られずに済んだから」

なんとか花束を取られずに済んだことを、2人に見せる。

すずか

「そういえば【なのは】ちゃん、その花束って、どこかに持って行くところだったの？」

なのは

「うん。よければ2人も来る？」

アリサ

「まあ、バスの時間もまだ大丈夫だし、付き合っただげるわ」

そのまま【アリサ】ちゃんと【すずか】ちゃんと一緒に向かったのは一つの公園。そこは、わたしにとつて思い出深い場所なの。

そして、【なのは】は公園の隅まで来ると、そこに花束を置き手を合せて黙祷。2人も一緒に手を合わせてくれる。

すずか

「ねえ、そのお花って？」

なのは

「えーとね、これはね……」

わたしは、昔ここで会った幽霊さんの話を2人に話す。

すずか

「へー【なのは】ちゃんに昔そんなことが……でも、わたし達が友達になれたのって、その幽霊さんのおかげでもあるのかなあ？」

なのは

「うん。そうなるの！」

あの時も、幽霊さんからの教えてもらったことを思い出して行動したから、【すずか】ちゃんと【アリサ】ちゃんとお友達になることができた。

アリサ

「【すずか】のいう通りね。あんたがその幽霊からの教えられたことをまもっていたからこそ、今のあたし達の関係があるわけよね。って待ちなさい！あんたが昔、あたしにああしたのって、元を辿ればその幽霊の教えのせいってことでもあるじゃない!?？」

なのは

「え!?？あの、それは、あはは……」

言われてみれば確かに。でもそれは、あの時わたし自身がそうするべきだって感じたからああしたんだけど。

すずか

「でも残念だね。結局その幽霊さんとはそれっきりなんて……」

なのは

「うん。結局名前も聞くことができなかつたんだ。だから、もしまた会えたら、ちゃんとお礼が言いたかつたんだけど」

そう。その幽霊さんとは、初めて会ったあの時だけで、その後は何回この場所に来て二度と会うことは無かつた。それでも、感謝の意味を込めて毎年この場所にお花を供えているのだ。

けど、もしあの幽霊さんが生まれ変わって、それで、わたしのことを覚えていてくれたらって思うと……

なのは

「ちゃんとわたしの気持ちを伝えたいな……」

すずか

「え!?？【なのは】ちゃん、それって……」

アリサ

「まさかあんた、その幽霊に……」

なのは

「ふえっ!?？な、なんのことかなあ？あ、そうだ2人とも、そろそろバスの来る時間じゃない。急がないと！」

ついつい口走ってしまったことに、2人が反応する。そう、あの日、わたしを変えてくれたあの幽霊さん。たとえば彼が幽霊でも、わたしは今でもあの人のことが……

くく??? 視点くく

???

「はあはあはあ!」

あれから、僕が気を失ってから、どれくらいの時間が経ったのだろう。それ以上に、彼の安否が一番気がかりだ。

少しでも彼の痕跡を見つけられないか森の中を探し回る。

???

「でも、こんな身体で僕に何ができるんだろう?」

僕自身も力を失ってしまい、こんな無力な身体になってしまい、このまま彼を助けるどころか、自分の使命すら果たせるのか? そんな不安ばかりが渦巻き、その場に立ち尽くす。

野犬

「グルルルル……」

???

「はっ!?」

いつの間にか僕の周りを数匹の野犬に取り囲まれていた。

???

「くそっ!この程度の相手にすら、こんな体たらくとは」

僕が持っている“コレ”を満足に扱うこともできず、戦う術が無い己の無力さを嫌でも痛感させられ歯痒い。

彼は野犬の間をすり抜け、その場を逃げ出す。

くくなのは視点くく

アリサ

「うわあ、予想以上にひどい有様ね」

すずか

「まるで、この場所だけ嵐が通り過ぎたみたい」

なのは

「うん。そうだね」

放課後、わたし達は塾に行く道すがら、例の裏山を見に行っていた。話に聞いていた通りのひどい有様で、警察の人達が封鎖している。

ただ、それ以上にわたしはこの場所を見て、わたしは昨日見た夢の場所と重なって見えてしまう。そんなことを感じながら、すると……???

(……助けて……)

なのは

「ねえ、いま何か聞こえなかった?」

すずか

「何か?」

アリサ

「別に、聞こえなかったわよ?」

声が聞こえた気がしたが、2人にはさっきの声は聞こえてなかったみたい。ただわたしは、その助けてと言う声が気になって、声の聞こえた方へと向かう。

そこにいたのは、地面の真ん中で倒れてグッタリしている細長い1匹の動物がいた。

アリサ

「なに、動物?」

すずか

「ケガしてるの?」

なのは

「うん……そうみたい」

アリサ

「とりあえず、病院……獣医さんのところよっ!」

わたし達はその動物を抱えて、動物病院へと急いだ。

?夜・高町家?

なのは

「はああ……今日は朝から、いろいろと考えさせられちゃったなあ……」

わたしは自分の部屋で、今日のことを思い返す。

昨日の夜に見た夢に始まり、昔出会った幽霊さんのこと。  
学校で先生からされた自分の将来の夢。

そして、夢で見た場所と似た場所で拾って保護した、あのフェレットのことで、思い出すとキリがない。

なのは  
「昨日見た夢のことは置いておくとして。自分の将来の夢かあ。うくん、『翠屋』を手伝っていきたくって気持ちはあるけど、継ぎたいかって言われれば、わたし自身のころからしたいって言ってるわけじゃないしなあ……」

昔、幽霊さんから教えてもらった、自分の心が命じならそれが今自分がしたいこと。それを思い出すと、『翠屋』を継ぎたいとは思えず、ただ、他にしたいことがあると、はつきりと決まっているわけでもない。

なのは

「わたし自身のやりたいことってなんだろう？」

わたしの胸に手を当てて考えるが、まったく浮かんでこないなあ。

なのは

「そういえば、あのフェレットのことどうしよう……」

【アリサ】ちゃんと【すずか】ちゃんと、あの森で拾って保護したフェレットのことについてケータイでやりとりをする。

2人ともそれぞれ犬や猫を飼っているから難しいようだ。

かくいうわたしも、家が食べ物関係だから難しい。

やっぱり、誰か別の人に飼ってもらえないのかなあ。

キイイイイイン！

なのは

「!?？」

突然の耳鳴りに驚き耳を塞ぐ。それでも耳鳴りは鳴り止まず、すると音に混じって声が聞こえてきた。

声

(クッ！力が…誰……か……)

なのは

「この声……」

その声はあの森で聞こえた声と同じもの。その声が聞こえた瞬間、思い浮かんだのはあのフェレットを預けた動物病院。わたしは家族の目を盗んで動物病院へと走った。

？動物病院？

動物病院の近くまで来た途端、周りの空気がガラツと一変。それもああるけど、周囲に人の気配がまったく感じられない。

そして、動物病院に着くと病院は無残な有様。その瓦礫から小さい影、フェレットと謎の巨大な黒い塊が飛び出す。

フェレットはそのまま黒い塊に弾き飛ばされる。

なのは

「んな…なに!?? いったいなに!??」

事態を受け止めきれず、とっさに【なのは】はフェレットを受け止めたままその場にへたり込む。

フェレット

(そんな!?? どうしてこんなところに人が!??)

なのは

「その声……やっぱり、きみが呼んでいたの?」

フェレット

「まさか!?? 僕の念話が聞こえてる!?? そんな…じゃあ、彼女にも魔力が……」

フェレットは自分の発した念話が【なのは】に聞こえていたことに驚き、彼女のなかに魔力が存在していると口走る。

フェレット

「ハッ…ここは僕が抑えるから、きみはすぐにこの場から離れるんだ!」

なのは

「え!?? でも……」

フェレット

「早く!」

戸惑う【なのは】を尻目に、フェレットは首に下げた赤い玉を握る。



フェレット

「この身体でどこまでやれるかわからないけど、せめて時間稼ぎくらいは……頼む、《R H》！」  
レイジングハート

そのまま黒い塊に向かって飛び出して行くフェレット。

しかしなんの攻撃手段も持たないため、なんとか【なのは】から気を晒し、距離を少しずつ離すのが精一杯。

フェレット

「グワア！」

そして追い詰められた末、黒い塊が触手を横薙ぎに振りフェレットをはたき落とす。その拍子に《RH》と呼ばれた首に下げていた赤い玉が外れ、弾き飛ばされてしまう。

弾き飛ばされた《RH》はそのまま【なのは】の元に転がり落ちる。

なのは

「これ……」

【なのは】は自分の足元に落ちた《RH》を拾う。

フェレット

「きみ！ それを持って早く逃げるんだ！」

なのは

「え!? ? そんな……」

フェレット

「早く！ はっ!? ? グワアアア！」

なのは

「ああー！」

必死で【なのは】に逃げろと叫んだフェレットだが、彼女に気を取られてしまい、塊の触手に拘束されてしまった。

なのは

「どうしよう……」

【なのは】は自分がどうするべきなのかわからず、思い悩む。  
???

【なのは】、なにを悩む必要があるんだい？」  
なのは

「ふえ？ 【征騎】くん？」

突然【なのは】の前に現れたのは、彼女から毛嫌いされていた男子

【征騎 王士】だ。

王士

「【なのは】、きみはすでに力を手にしているじゃないか。さあ、僕の言う通りにするんだ」

【王士】はそのまま【なのは】の手を掴む。

王士

「管理権限新規使用者設定機能フルオープン」

フェレット

「な、なんだと!?!」

【王士】のとった行動にフェレットは目を見張る。

王士

「僕に続いてこう言うんだ。風は空に 星は天に 不屈の魂はこの胸に この手に魔法を……!」

フェレット

「ど、どうして《RH》の起動呪文を……」

【なのは】もこの状況で拒絶する余裕もなく、なすがままに、

なのは

「か、風は空に……星は……天に……っ！不屈の魂はこの胸に……この手に魔法を……!」

王士&なのは

「《RH》セット・アップ!」

呪文を唱え終わった瞬間【なのは】の周りを光と衝撃が包み、そのまま彼女は空へと浮かび上がり、彼女の姿が瞬時に変わっていく。

(その際、触手の拘束が解けフェレットは脱出した)

なのは

「え……えええええええっ!?!」

王士

「ふふ……成功だ……ハッハッハッ! やったぞ! 俺がフェレットの役目を奪ってやったぞ!」

ユーノ

「そんな……僕は……また……」

【なのは】は自分の状態に驚き、【王土】は高笑いをあげ、フエレッツもとい【ユーノ】は茫然と空を見上げていた。

To be continue

## 第7話 『繰り返されるあやまち』

くくユーノ視点くく

【ユーノ・スクライア】は、自分の目の前の少女が《ジュエルシード》の思念体と対峙する姿を見て、彼を巻き込んだことと全く同じことを自分は繰り返してしまつたと、後悔の念に苛まれていた。

なのは

「え……えええええええつ!?」

彼女に渡してしまつたデバ<sup>R</sup>イスをいとも簡単に起動させることに成功させ、僕が無意識に発してしまつた念話を聞いてやって来てしまつた少女。念話が聞こえた次点で彼女に少なくとも魔力があることがわかる。その時に、彼女に協力を仰ごうと一瞬でも思つてしまつた自分を激しく責めたい。事実、彼女自身が自分の身に起こつたことを受け入れきれずにいる。

それもそうだ。あくまで彼女はただ魔力を持っているだけなのだから。

ユーノ

「そんな……僕は……また……」

そんな理由で赤の他人に協力を仰いだ結果が、彼をあんな目に合わせってしまったのに。その誤ちを、僕は繰り返してしまつたのだ。

そんな【ユーノ】の後悔を他所に、《ジュエルシード》の塊は【なのは】へと狙いを変え、そのまま空中戦を繰り広げる。

そんな2人の戦いを、ファー付きの青いマントに金ラインの入つた派手な鎧を纏つた奇抜な格好をした【王土】はニヤニヤと眺めていた。

ユーノ

「っ！どうして?どうして彼女を巻き込む!?そもそもきみは何者だ!?なぜきみが《RH》の起動呪文を知っている!?」

王土

「ん?……ふんっ!?」

ユーノ

「ウワァァァ!」

「【ユーノ】が【王土】を責め立てた瞬間、【王土】は【ユーノ】を片手で払う。

瞬間、激しい風が吹き荒れ、【ユーノ】を吹き飛ばす。同時に地面が激しく切られたように一筋の線が入っていた。

ユーノ

「な、なにが起きたんだ？まさか、今のは魔法？きみは魔導師なのか？」

王土

「ふっ、その通り！僕こそ王であり騎士として、そして主人公として君臨し、全てを征する最強の魔導師だ！」

ユーノ

「きみはなにを言って……」

王土

「そして、手始めに貴様の役割を全て奪い、僕が蹂躪してやろう！」

ユーノ

「グワアアア！」

「【王土】がもう片方の手から幅が広めの剣が現れ、そこから雷を落とし【ユーノ】を襲う。

ユーノ

「グツ…グウウ…ま、まさか、風と雷の魔力変換…だと？」

王土

「ほお、一撃で僕の能力に気づくとは、淫獣のくせにやるではないか」

「【王土】は得意げに右手に風を巻き起こす不可視の剣と思わしき物を。左手に雷を纏った幅広の剣を見せつける。

ユーノ

「そんな力を持っているなら、なぜ彼女を巻き込むようなまねをする！彼女は関係ないはずだ!?!」

王土

「関係ない？なにを言っている。それでは『リリカルなのは』の物語が始まらないじゃないか？そもそも、貴様がさっさと【なのは】にデバイスを渡せばいいだけだったのに。自分の役割すら満足にできない

のか、この淫獣は……」

《リリカルなのは》、僕が【なのは】という子に《RH》を渡すのが役目？彼はなにを言ってるのか、僕には意味がわからない。

王士

「まあいい。【なのは】も無事に魔法少女になったことだ。これから彼女に魔法を教えるのはお前の代わりに僕が変わってやる。だからお前はここで消えろっ！」

ストライク・ライトニングシステム  
暴風雷光王鉄槌！」

ユーノ

「ッ……い！」

【王士】は2つの剣を同時に振るうと、砲弾のような雷を纏った突風の塊を【ユーノ】に向かつて放つ。

ダメだ！避けられない……

光速で向かってくる攻撃に避けられないと【ユーノ】が思った瞬間、彼の目の前になにかが落下してきた。

それに【王士】の攻撃が当たった瞬間、

王士

「なっ……？俺の攻撃が……い！」

弾かれるようにそのまま【王士】へと跳ね返っていく。

そのまま【王士】は自分の攻撃で吹っ飛ばされた。

ユーノ

「これは……彼の……」

地面に刺さったそれを見て、【ユーノ】はすぐに彼のことを思い浮かべる。地面に刺さっていた1本の太刀を。

くくなのは視点くく

わたしはなんとか《RH》の指示で魔法の使い方を教えてもらいながら、生き物のような、《ジュエルシード》の思念体と戦うことができていた。

なのは

「すごい……これなら……」

【征騎】くんと言われるままにしていたが、わたしが《RH》を起動して、わたしに力があると教えられた時、正直胸が高鳴った。なにも取り柄がなくて、やりたいことも見つからなかったわたしに、こんな力があるんだって。

RH

《利き手を前に出して、撃ってください》

なのは

「はい…ッ！」

左手を思念体に向け、そこから魔力が集まると、1発の光の弾丸となり発射。そのまま思念体を貫く。

なのは

「はあはあ……やったの？」

RH

《いえ、まだです》

無事に思念体を倒したかと思ったけど、《RH》からそう言われた。見ると思念体は散った身体が元に戻っていき、何体かに分裂したのだ。

しかし、そのまま向かってくるかと思ったが、分裂した思念体たちは【なのは】に背を向けそのまま逃亡を図る。

なのは

「だめ…ッ！逃げる…ッ！」

このままじゃ、人のいるところに出て行かれましたらまずい。

しかし必死に追いかけているが分裂したことにより先ほどよりも小さくなり、動きが素早くなかなか追いつけなかった。

そこでわたしはあることを思いつく。

なのは

「ねえ《RH》？さっきの光をもっと遠くまで飛ばせない？」

RH

《問題ありません。あなたが望むままに応えましょう》

すると《RH》はその形を変え、さっきの杖のような姿から、杖の先が砲身のようになり、持ち手にトリガーが現れる。

R H

《直射砲形態……発射準備完了……対象をロックオン》

なのは

「シューート……ッ！」

先ほどの弾丸とは比べ物にならない巨大な砲撃が撃たれ、そのまま思念体を全て飲み込み、一撃で思念体を消し去った。

後に残されていたのは、思念体の核となっていた《ジュエルシード》が空中に漂っているだけだ。

R H

《そのまま《ジュエルシード》を私で触れてください》

なのは

「……？」

そして、《R H》の先で《ジュエルシード》に触れるとそのまま吸収した。

なのは

「お、終わったの……」

R H

《大丈夫ですか？》

なのは

「う、うん……大丈夫……だと思……う……」

無事に終わったことに安堵したのか、【なのは】は変身を解きその場にへたり込む。

しかし、安心したのも束の間、

なのは

「キャッ！なに……？？」

突然吹き荒れた突風と地面を走る雷光に目を見張る。

なのは

「え……？？……どうして【征騎】くんがフェレットを襲ってるの……？」

なぜか【征騎】くんがフェレットに剣を向けているのだ。すぐに止めに入ろうとしたけど、【征騎】くんは剣を振り下ろそうとしていて、ここからじゃ間に合いそうにない。



なのは

「どうしたの《RH》？」

RH

《いえ、これは私じゃありません。私に中に収められているものが……》

《RH》が震えたかと思ったら何か飛び出し、フェレットに向かって飛んでいったかと思ったら、そこには倒れた【征騎】くんがいた。

なのは

「改めて自己紹介、わたし【なのは】、【高町 なのは】！」

ユーノ

「えっと、【ユーノ】です……【ユーノ・スクライア】……」

なのは

「うん、わたしのことは名前で呼んでいいからね、【ユーノ】くん」

ユーノ

「うん……【なのは】……」

あの戦闘が終わり、場所を変えお互いの自己紹介をする2人。

そして、【ユーノ】から散らばった《ジュエルシード》のこと、それを集めるために地球とは別の世界から来たことを【なのは】に話す。

ユーノ

「今回の件に関しては、巻き込んでしまつて本当に申し訳ない。だけど【なのは】が戦うのは今回限りだけにしたい。ボクの魔力が戻るのはまだ時間がかかるけど、あとはボク1人でやらせてもらう……」

なのは

「え……!?？ そんな……あんな危険なことを【ユーノ】くん1人でするなんて……」

ユーノ

「【なのは】……これは本当に危険なんだ……これ以上巻き込むことはできない……」

なのは

「でも、わたしは【ユーノ】くんを助けることができるんだよね？魔法の力で……」

《ジュエルシード》を1人で集めるという【ユーノ】だが、【なのは】はまだ食い下がる。

ユーノ

【なのは】、キミはあくまで魔力を持っているだけだ。それに、キミにはちゃんと言っておきたい……ボクはこの件でキミの前に1人、同じように巻き込んでしまっているんだ……」

なのは

「え……？じゃあその人って今は……？」

ユーノ

「……」

【なのは】の問いかけに【ユーノ】は目を伏せながら、傍らに置いていた太刀を一瞥。その様子に【なのは】はこれ以上聞くようなことはしなかった。

【なのは】はしばし考え、

なのは

【ユーノ】くん……確かにわたしは魔力があつて、《RH》が使えるだけかもしれない。危険なのは十分わかつてるよ。でも、わたし自身のココロが【ユーノ】くんを助けたいって思うんだ。わたしのココロがそう命じたから、キミに協力したいんだ……」

ユーノ

【なのは】……わかった……なら改めて、キミに協力を仰ぎたい……」

なのは

「うん……よろしくね【ユーノ】くん！」

2人は改めて協力関係を結ぶ。

ユーノ

「あ……でも、ちゃんとキミの家族には説明しないとね……」

なのは

「ありや……うん……そうだね……」

その後、【なのは】の家に戻り家族を交えて《ジュエルシード》集め

について説明をする。

最初こそ家族は反対していたが、【なのは】自身の口から協力したいという強い希望と【ユーノ】の説得に家族は渋々ながらも了承するのだった。

なのは

「でも【ユーノ】くん、その協力してた人も【ユーノ】くんと同じフェレットなんだよね？その割に、そんな刀を使ってたの？」

ユーノ

「なに言ってるの……彼は人間だし、この姿は魔力を回復させ易くするためで、僕も本当は普通の人間だよ……」

なのは

「エエエエエ！【ユーノ】くん人間だったの!?!？」

ユーノ

「なんでそこまで驚くのさ……」

【ユーノ】が人間の男の子ということに、【なのは】は今日一番の驚きの声を上げる。

???

「第97管理外世界《地球》……ここに母さんの探し物…《ジュエルシード》がある……」

高層ビルの屋上。夜風に金髪を揺らし、街を見下ろしながら少女が  
眩く。

???

「ああ……あの人の話だとそうらしい……」

その背後から、目元をバイザーで隠した少年が現れ、金髪の少女の隣に立つ。

《ジュエルシード》を集めるもう一つの勢力もまた動き出すのだった。

T o b e c o n t i n u e

## 第8話 『かつて手放したもの』

窓からなにもない異様な空間だけが広がる《時の庭園》。その閑散とした廊下を女性が1人カートを押しながら進む。

そして、ある部屋の前に着き中に入る。その部屋だけ窓の外から日の光がさす。そこから鳥や風に揺れる草花が見えるが、どこか映像としか思えないような一定の動きしかなしい。その中央に薄いカーテンに仕切られたベッドが置かれている。

カーテンの隙間から、誰かが眠っているようだ。女性はカーテンを開くと、女性は愛おしそうに人物の頬に手を添えていた。

? 数日前・地球?

???

「ここが《地球》……」

そう言いながら夜の森に1人の女性、「リニス」が降り立つ。

リニス

「ここに《ジュエルシード》が。とりあえず、”あの子達”が活動しやすいように生活拠点の確保と、あとは……」

彼女が《地球》に来た目的は、《ジュエルシード》を集めるための下準備のために先行してやって来ていた。そして、もう一つの目的が……

? 《時の庭園》?

リニス

「《ジュエルシード》の所在がわかったんですか、「プレシア」」

プレシア

「ええ。場所は第97管理外世界《地球》よ。まさか、こんな形で行くことになるとは思わなかったけど……」

私の主である【プレシア】は、自分の目的のために探していた《ジュエルシード》の所在がわかったことを喜んでいたが、どこか悲しげな表情をしていた。

プレシア

「《ジュエルシード》の居場所がわかった以上、”アレ”が使い物になるように早急に仕上げなさい。まあ、《地球》で最低限の生活ができる拠点くらいは整えておきなさい。その後は、私の前から消えるなり好きにしなさい」

リニス

「わかりました……」

”あの子”のことをアレ呼ばわりとは。反論したい反面、彼女の使い魔である自分と「プレシア」との精神リンクで彼女の心情を理解しているぶんその言葉を呑み込む。

あの子の向こうでの生活環境を整えるのは、少ない彼女なりのあの子への情からだと思いたい。

プレシア

「それと、この場所の【織斑】という人間に会って来なさい。向こうが求めるなら私が直接出向くのも厭わないわ」

リニス

「いいのですか？あまりそこの人間と関わるのは得策ではないかと。そもそも、この人物と【プレシア】との関係は？」

プレシア

「余計な詮索はやめなさい。少なくとも、あなたが知る必要がないことよ。（少なくとも、”あの子”の身内には私からあの子の最期を伝える義務があるのだから……）」

そう話す【プレシア】の顔はやはり悲痛なものだった。

？ 《海鳴市・森》？

リニス

「この【織斑】という人間と【プレシア】の関係は一体？ツ！魔力反応!?？そんな、《地球》には魔導師はいないはず」

【プレシア】からの命令を確認していたところ、突然感じた魔力に、自分以外に《ジュエルシード》を狙う魔導師が現れたと思い周囲を警戒する。

しかし、いつまで経っても襲ってくる気配を感じない。

リニス

「ん？あれは……」

すると川上の方からなにかが流れてきている。それはそのまま川岸に引つかかったので、そこへ向かう。そこにいたのは、男の子。

男の子

「ウツ！うう……」

リニス

「この子魔力が。それにこの傷すぐに治療しないと！」

彼からは微かに魔力を感じる。それに先ほどまでなにかと戦っていたと思える傷がひどく目立つ。辛うじて生きているが予断を許さない状態に変わりないため、すぐに【プレシア】へと通信をつなぐ。

リニス

【プレシア】聞こえますか！？こちら【リニス】です！

プレシア

『騒がしいわね。どうしたの【リニス】？わたしの言いつけは済んだの？』

リニス

「いえ、それはまだ。ですが、到着した場所で負傷者の少年を発見しました。見たところ魔導師のようで、すぐに処置をしないと危険な状態です」

プレシア

『はあ……【リニス】、私を失望させないでちょうだい。私達にそんなことに構っている余裕があるはずないでしょ？いいから、さっさと私の言った用事を済ませて来なさい』

リニス

「クッ！それは、この子を見捨てろってことですか……」

プレシア

『私の使い魔らしくわかつているじゃない。ましてや幼いとはいえ魔導師なんて、もし《管理局》に属する人間だったらこちらの目的を知られる危険もあるのよ』

【プレシア】の言いたいことはわかる。彼女の残された時間が少ないとはいえ、ここまで非情になるなんて。

しかし私は、彼女の命令に従ってこのままこの少年を見捨てること  
が正しいとは思えない。

プレシア

『ちよつと待ちなさい。その少年の顔を私の方に見せなさい』

リニス

「は？わかりました」

倒れた少年が「プレシア」に見えるように画面を向ける。

プレシア

『・・・気が変わったわ。すぐに《時の庭園》に戻ってきなさい。そこ  
の少年も一緒に連れてね』

リニス

「え？ですが今……」

プレシア

『同じことを言わせないで。さっさとその少年と一緒に戻ってきなさい』  
い』

リニス

「わかりました」

最初見捨てろと言っていた「プレシア」がこの少年を見た途端、態  
度を変えるなんて。彼女が一体この少年になにを見たのかわからな  
いが、今は彼を連れて行くのが先決。

【リニス】は少年を抱えると、《時の庭園》への座標を開き転移して  
いくのだった。

？ 《時の庭園》？

プレシア

「どうしてあの子が《地球》に？いえ、それよりもあの子はとうの昔に  
私の前からいなくなつたのに」

当時と変わらない姿であるけど、見間違えるはずがない。

プレシア

「生きててくれた……ああ”【一夏】”……」

【リニス】が《地球》で保護した少年は、あれは間違いなく、【アリ

シア」と一緒に事故に巻き込まれて私の前から消えてしまった【織斑一夏】だったのだ。

【プレシア】が《時の庭園》に【一夏】を保護してからしばらく経ち。???

「おーい！【フェイト】ー！」

フェイト

「どうしたの？【アルフ】？」

金髪の少女【フェイト】に、彼女の使い魔の【アルフ】が呼ぶ。

アルフ

「ねえねえ、あたし達が今度行く世界が決まったんだって？」

フェイト

「うん、ついに母さんの探していた《ジュエルシード》が見つかったんだ。場所は《地球》って世界らしいよ」

アルフ

「それはいいとしてさ、プレシアどうしてあの女はそんなものを欲しがっているんだい？」

フェイト

「わからない。けど、母さんが必要だって言うなら、わたしはそれに従うだけだから」

アルフ

「【フェイト】……」

【プレシア】の命令に従うためだけに、感情の無いような話方をする【フェイト】に【アルフ】は複雑な表情を浮かべる。

アルフ

「そういえば、【リニス】が向こうでのあたし達の拠点を確保してくれたいんだけど、こっちに戻ってきてからこっちに顔見せないね」

フェイト

「うん。なんでも母さんの指示でなにかしてるみたいだよ」

アルフ

「そっかー……って噂をすれば、あそこにいるのって【リニス】じゃな



「いかい？」

フェイト

「うん、そうだね。あの部屋から出てきたみたい」

用事を済ませた後らしく、カートを押しながら「リニス」がこちらに気付くことなく部屋から出てそのまま向こうに行ってしまう。

フェイト

「この部屋ってたしか母さんが入るなって言ってた……」

アルフ

「でも、鍵は掛かって無いみたいだ。ちよつと入ってみようか？」

フェイト

「え!?？ちよ、ちよつと【アルフ】！勝手に入っちゃ……」

鍵が掛かっていないことをいいことに、【アルフ】は部屋の中に入っ  
て行ってしまふ。その後を【フェイト】も追いかけて行く。

アルフ

「はくずいぶんとのかな部屋にしてあるね」

フェイト

「うん。あれ、あそこにあるベッドって……」

部屋の中に入ってすぐ、部屋の雰囲気もそうだが、真ん中に置かれたベッドが目についた。

そのままベッドの方へ行き、カーテンを開ける。

フェイト

「え？男の子？」

アルフ

「どうしてこんなところで寝てるんだろうね？」

そこにいたのは、見慣れない男の子がベッドで眠っていた。【リニス】は母さんの指示でこの男の子の世話をしていたらしい。

フェイト

「それにしても、この男の子……」

この男の子を見ているとなにか懐かしいような気持ちを感じてしま  
い気づいたらその男の子に触れてしまったいた。

アルフ

「【フェイト】？」

フェイト

「ハッ！【アルフ】そろそろ行こう。ここにいたら母さんに怒られちゃう」

そもそもこの部屋には入っちゃいけないって母さんから言われていたのに、勝手に入ってしまったのはわたし達だ。

フェイト

「・・・え!?？」

部屋を出て行こうとした後ろを向いた瞬間、わたしの手が突然掴まれた。

振り向くと、さっきの男の子の手がわたしの腕を掴んでいたのだ。

男の子

「きみ・・・は……」

すると眠っていたはずの男の子が、ゆっくりと目を覚ましていた。

ここはどこだ？どうして俺はここにいる？

自分の周りに広がるのは、果てしなく何も無い空間ばかり。

俺はなんでここにいるのかわからない。そもそも俺は……

突然気配を感じた。気配の感じた方を向くと、そこにいたのは女の子。

しかし、顔はノイズが掛かっているように見えない。なのに……

どうして、そんなかなしそうにしてるんだ？

そして、女の子はかなしそうな表情のまま俺から離れて行く。

待ってくれ！

俺は女の子に向かって手を伸ばす。俺がその子の手を掴んだ時、その女の子はおらず、そこにいたのは見知らない金髪の女の子がいたのだ。

一夏

「きみ・・・は……」

”俺はその子のことをまったく知らない”はずなのに、どこか懐かしさを感じていた。

突然目を覚ました【一夏】と、いきなり彼に掴まれ動けない【フェイト】。互いに呆けたままでいると、物音を聞きつけた【リニス】が戻ってきた。

リニス

「【フェイト】、【アルフ】！ここには入ってはいけないと【プレシア】から……」

フェイト

「ごめんなさい、【リニス】。でも、この子が……」

「【フェイト】が【一夏】の方を指す。【リニス】も目覚めた【一夏】を見て驚きを露わにする。

リニス

「あなたは……!?? 【フェイト】、あなた達はすぐにこの部屋から出て行きなさい！【プレシア】に見つかればなにをされるかわかりません。早く！」

フェイト

「わかった。行こう、【アルフ】」

「【リニス】に促され、【フェイト】達は部屋を後にした。

その後、【リニス】から【一夏】が目覚めたと知らせを受け、【プレシア】が部屋に駆け込む。

プレシア

「【一夏】、よかった目が覚めたのね！私のことわかる？」

リニス

「【プレシア】、彼は目覚めたばかりです。あまり激しく動かすのは……」

「【プレシア】からの問い掛けに【一夏】はいまだに呆けたまま、ゆっくりと彼女へと顔を動かす。そして、一言。

一夏

「あなたは誰ですか？」

プレシア

「へ？」

目覚めた【一夏】は、【プレシア】のことを知らない様子で答えたのだ。

プレシア

「な、なにを言ってるの？【プレシア】よ!?？あなたと【アリシア】と【リニス】、一緒に暮らしていたでしょ？覚えてないの？」

一夏

「わからない。なにも覚えてないんだ」

リニス

「もしや、あなた記憶を……」

【一夏】の様子から、【リニス】は彼を保護した時の状態を鑑みて、【一夏】が自分達の記憶を失っていると考えつく。

プレシア

「……」

リニス

「【プレシア】？」

そして、【プレシア】は黙って部屋から出て行つた。

プレシア

「ふ、ふふふふ……」

実の娘の【アリシア】を失い、生み出したアレは見た目こそあの子と同じでも、中身は別物。息子のように思い始めていた【一夏】は生きて戻って来ても、私のことをなにもかも忘れてしまっていた。

そして、私の身体も……

これは、子供達から逃げ続けていた私が背負う罪だとも言うの？

プレシア

「なら背負ってやるわ！《ジュエルシード》を全て集め、《アルハザード》への道を開いてみせる！そして私は今度こそ全てを取り戻してみせる！ハハハハハッ！」

壊れたような【プレシア】の笑い声が廊下に響き渡るのだった。

一夏

「プレシア」さまからの命であなた方の世話役を仰せつかりました、  
「ソウル」とお呼びください」

フェイト

「え？母さんから？」

アルフ

「フンツ！あの女からのつて時点で、あたしは信用できないけどね！」

「フェイト」達が《地球》での拠点にしているマンションで、記憶を失った「一夏」、もとい「ソウル」と「フェイト」、「アルフ」との顔合わせ。

しかし、「フェイト」はいきなり自分の世話役だと言う「ソウル」に困惑。「アルフ」は「プレシア」からの手の者ということに警戒心剥き出し。

フェイト

「そもそも、きみと母さんとの関係って？」

ソウル

「申し訳ございません。自分は、事故によりここに来る以前の記憶を失っており、運良く「プレシア」さまに保護をしていただいたということしかわからなくて。それに、向こうと連絡を取りやすくするためということ、あの方の使い魔の「リニス」を譲り受け、契約を交わらせていただいています」

フェイト

「そっか。きみも大変だね」

アルフ

「うーん。「リニス」がすんなり契約を結んだってんなら、少なくとも信頼してもいいのかねえ」

2人は「ソウル」の話を信じ、警戒を緩めてくれる。

フェイト

「じゃあ早速、《ジュエルシード》を探しに行こうか？」

ソウル

「お待ちください。今日はもう遅いうえ、まだお食事も済んでいない様子。すぐに支度をしますからお待ちを」

フエイト

「必要ないよ。そんなことをしている暇があるなら、1つでも多く《ジユエルシード》を見つけなさいと」

ソウル

「そんなこと・・・だと?」

「【フエイト】の言葉に【ソウル】のまとう雰囲気が変わった。

ソウル

「食事とはその人が活動するために必要なエネルギーの源。ましてや【フエイト】、あなたは【プレシア】さまから大役を仰せつかった身だろうが!そんなことでまともに役目を果たすことができると思うな!」

フエイト

「は、はい……」

ソウル

「そして【アルフ】、それはなんだ?」

アルフ

「な、なについてドッグフード……」

「【ソウル】は【アルフ】の後ろに置かれた、彼女が大量に買い込んだであろうドッグフードの山を睨みつける。

ソウル

「使い魔といえど、お前今の姿を考えると元が狼だからって人の姿でも犬の餌ばかり食ってんじゃねえ!」

アルフ

「ひいー!、ごめんなさい!」

先ほどまでのかしまった態度から一変。【ソウル】の雰囲気に完全に呑まれ、大人しくなる【フエイト】と【アルフ】。

ソウル

「いいか、俺の目の黒いうちは1日3食50品目、しっかりと取ってもらうからな。復唱!」

フエイト

「い、1日3食50品目……」

ソウル

「声が小さい！」

【ソウル】の作った食事を取った【フエイト】と【アルフ】は、《ジュエルシード》の探索に入り、早速一個発見することができ、幸先の良いスタートを切るのだった。

その際、2人が【ソウル】の料理の虜になったのはまた別の話。

T o b e c o n t i n u e

## 第9話 『邂逅する2人立ちはだかる友』

???

『へえ、こいつが《デバイス》ってやつか』

???

『そ、名前は《■》。《インテリジェントデバイス》と言って、高度なAIを搭載していて、魔法の発動処理や調整を自己判断で行ってくれる反面、使い手を選ぶから逆にデバイスに振り回されることもあるんだ。ちなみに僕は後者……そもそも僕は攻撃系の魔法より、防御や補助の後方支援が得意なくらいなんだ』

???

『まあ、人それぞれってやつか。それと、よろしくな《■》』

《Nice to meet you》  
【Ichika】

ソウル

「ん……なんだったんだ、今のは？」

目覚めた俺はベッドから起き上がる。どうやら夢を見ていたらしい。

顔こそ霧がかって誰かわからないが、妙に親しみを感じることができた。

ソウル

「あれはいつたい……」

あの夢に出てきた人物は、俺が記憶を失う前に関係しているのか。???

「【ソウル】起きてる？」

ソウル

「ん？【フェイト】か？ああ、起きてるぞ」

俺が見た夢のことを考えていると、【フェイト】が俺のことを呼びに来る。

フェイト



「よかった。実は《ジュエルシード》と思える反応を捉えたから、今からそこに向かおうと思ってるんだ」

ソウル

「そうか。だが、その前に……」

フエイト

「ん？」

ソウル

「朝食だ。すぐに支度するから待ってろ」

フエイト

「うん！」

この間は、食事なんてそっちのけで「プレシア」さまの命令を遂行することに躍起になってたのに、昨日の今日で俺の食事を楽しみにしてくれるようになってくれて、俺も作りがいがあるってものだ。

とりあえずあの夢については、今の俺ではわかるはずもない。今は目先のことに集中するでしょう。

ソウル

「あれが、《ジュエルシード》の発動体で間違いない……のか？」

フエイト

「うん……間違いない……と思う」

子猫？

「にやあ〜」

2人が見上げた先には、ただただ巨大としか言いようがない子猫。「フエイト」が言うには、大きくなりたいと願った子猫が《ジュエルシード》に触れ、単純にその身体を大きくしたのだと言う。

ソウル

「まあ、暴走して襲いかかってこない分、すぐに済みそうだな」

フエイト

「そうだね。じゃあ早速」バルディッシュ《B D》

B D

《yes sir》

【フェイト】は懐から彼女のデバイスの、《BD》という名の黄色い三角形の宝石を取り出す。

ソウル

「《インテリジェントデバイス》か」

フェイト

「うん、名前は《BD》。【リニス】が作ってくれたデバイスなんだ。でも【ソウル】、紹介してなかったのに《BD》が《インテリジェントデバイス》って知ってたんだね」

ソウル

「ん？あれ、なんか自然と口に出てたわ。まあよろしくな《BD》」

BD

《yeah》

【ソウル】自身、《BD》を見て口走った言葉に自分でもよくわかっていなかったが、それは置いといて軽く《BD》と挨拶を交わす。

フェイト

「そういえば【ソウル】が顔に付けているのって？」

ソウル

「あ、ああ、なにぶん俺はデバイスの扱いが不得手でな。【プレシア】さまからせめて通信と解析を兼ねてこれを渡されたんだ」

彼が顔に装着していたのは、黒いゴーグルと赤と黒を基調にしたヘッドフォン。その際【ソウル】がやや歯切れが悪そうにしていたが。（※閃の軌跡アタッチメント、ミッドナイトヘブン&ワールドエンド）

フェイト

「そっか。じゃあ、【ソウル】はフォローを。わたしはアレを倒して《ジュエルシード》を取り出す」

ソウル

「まてまて！【フェイト】、お前なにしようとしてんだ？」

フェイト

「なになって、あの猫へ魔法で攻撃を」

子猫(?)へ放電した状態の杖を向けながら、しれっとした態度の【フェイト】を慌てて止める。

ソウル

「よく見ろ。あの猫、首輪がしてある。それに、さつき周りを見てみたが向こうに民家らしき建物もあった」

フエイト

「そう、それで？」

ソウル

「つまり、あの猫はこの家の敷地内で飼われてる猫だってことだ。それも、一般家庭とは比べ物にならない上流家庭のな」

子猫の首には身につけていたものも一緒に、巨大化した首輪が巻かれている。さらに「ソウル」はゴーグルに備わっている望遠機能で周囲を見たところ、向こうに豪邸としか言いようがないが、民家と思しき建物。そして自分達がいるのは、その家の敷地内のほんの一部だったということだ。

ソウル

「そんな家の飼い猫を傷つけたとなれば、家の人間が黙ってないだろう。こんな家に住んでる人間なら、この街の有力者の可能性だってあるはずだ。この街に来たばかりの俺たちが下手にそんな人間に目をつけられれば、今後の活動に支障をきたしかねない」

フエイト

「うん、言われてみれば。すごいね、「ソウル」。この状況でそこまで考えられるなんて。でもアレをどうするの？」

ソウル

「さつきお前が言ってただろ。アレは発動こそしているが、比較的暴走の危険性は無いって。なら俺がああ猫の注意を引いて宥めるから、その隙に「フエイト」が封印してくれ」

フエイト

「わかった」

2人の作戦が決まり、いざ行動を起こそうとした瞬間、空から猫に向け、一発の雷が落ちたのだ。

子猫

「ニヤッ!?？」

それを皮切りに、雷が何発も子猫を襲う。子猫は驚きでその場に縮こまっていた。

フェイト

「なに!?？」

ソウル

「見ろ、あそこだ!」

その上空、そこには、

高笑いを上げる男子

「ハーハッハッハッ! さあ! 獣風情が、さつさと俺に《ジュエルシード》を捧げろ!」

止める少女

「やめて! なに言ってるの!?? その子がかわいそうだよ!」

鎧を着込んで高笑いを上げながら片手に持った剣から雷を落とし続ける男子と、白い衣装に杖を持って男子を止めようとしている少女の2人組がいた。

ソウル

「見たところ2人とも魔導師みたいだな。どっちみちあの2人をどうにかしないと《ジュエルシード》は手に入らない。俺は男の方、【フェイト】はあつちの女の子の方を頼む」

フェイト

「えっ!?? ちよつと!」

【フェイト】に白服の少女の方を任せ、【ソウル】は子猫へと雷撃を落としている相手の方へと向かう。

高笑いを上げる男子

「とつとと倒れる獣風情が! じゃないと【フェイト】に会えないだろうが!」

男子を止める少女

「やめて【征騎】君! そもそも【フェイト】ってだれ!??」

当然のことながら、子猫を一方的に襲っていたのは、転生者でありこの場面に積極的に介入しようとしている【征騎 王土】。そしてそ

れを止めようとしていたのは、ついこの間魔法を使えるようになったばかりの少女、【高町 なのは】だった。

征騎

「これで・・・トドメだ！」

【征騎】が剣を振り上げ、そこから極大な雷球が放たれるのを待ち放電していた。

ソウル

「させるか！」

征騎

「なっ!? 何者だ！」

子猫に雷撃が落とされようとした瞬間、【ソウル】が間一髪2人(匹)のあいだに滑り込む。

ソウル

「こいつはやらせるか、《シールド》！」

征騎

「ハッ！その程度の防御で俺の魔法を防げるか！2匹揃って消えるがいい！」

【征騎】が鼻で笑うのも無理ない。これは【ソウル】が最初から使えた数少ない魔法であり、その大きさも身体が隠れるほどもない小ぶりなものだ。

そして放たれた雷は、極太の矢のように【ソウル】と子猫へと一直線に落とされ、柱のような空へと伸びる雷と派手な爆音が辺りに響く。

征騎

「はんっ！一瞬俺以外の転生者かと思ったが、あの程度の魔力量で俺の前に現れるなんてありえんな。まあ、今となっては消し飛んだ奴のことなんてどうでもいいが……」

【征騎】が完全に自分が勝利したと確信していた。

ソウル

「ふううう……」

征騎

「な、なににい!?？」

しかし予想に反し、2人はその場に踏みとどまっていたのだ。

そもそも【ソウル】は記憶を失っているようにと、「一夏」だった時に身に染み付いていた戦闘技能が彼を動かす。【征騎】は魔力量だけが一人前で巨大なだけの攻撃だったこともあり、【ソウル】は盾の形状を傘のように展開。さらに受け流せる角度を見極め受けることで【征騎】の魔法の威力を分散させ防ぐことができたのだ。

征騎

「な、なんで?なんで俺の魔法を受けて無事でいる!?？」

ソウル

「それを態々お前に教えてやる義理はない」

征騎

「なっ!??しまっ……ガフツ！」

自分の攻撃を格下と思っていた相手に防がれ、呆然としていた隙をついた【ソウル】が【征騎】の懐へ入り掌底を叩き込み、地面に倒れ伏す。

フェイト

「【ソウル】無事?」

ソウル

「ああ……そっちは?」

フェイト

「うん問題ない。相手の方もさほど驚異に感じなかったから」

【フェイト】も【なのは】との戦闘を終え、無事【ソウル】と合流を果たす。

その瞬間、

子猫

「ナアン！」

ソウル

「ゴフツ！」

猛スピードの車がぶつかってきたような衝撃が【ソウル】を襲い、彼は地面を跳ねるように転がる。先ほど助けた子猫が【ソウル】目掛け

突進してきたのだ。

フェイト

「ソ、【ソウル】！大丈夫!?？」

ソウル

「ああ、問題ない。大丈夫だ（ガクガクガク）」

フェイト

「【ソウル】、セリフと状態が合っていないよ」

明らかに【征騎】と戦った時よりボロボロの状態で、突進による衝撃が足にきている様子の【ソウル】。

そんな状態をよそに、子猫はその巨体を【ソウル】に擦り寄せる。  
ソウル

「なんだ？助けてくれた礼のつもりか？たまたま俺たちに必要なものをお前が持っていただけだ」

【ソウル】は子猫の顎を撫でながら、子猫はゴロゴロと喉を鳴らし  
ゆっくりと眠りにつく。

ソウル

「【フェイト】、今のうちに封印を」

フェイト

「あ、わかった。《ジュエルシード》封印！」

子猫が眠ったすきに《ジュエルシード》を封印。元の大きさに戻った子猫は眠ったまま下におろし、その場を後にしようとする。

なのは

「待って！」

ソウル

「ん？」

フェイト

「あの子……」

すると、先の【フェイト】と戦いで敗北を期した【なのは】がボロボロの身体を引きずりながら追いつく。

ユーノ

「君たちは何者だ!?なぜ《ジュエルシード》を集める!??答えてくれ

！」

【なのは】の肩に乗っていた【ユーノ】も2人へ問いただす。  
ソウル

「あの2人は……ッ!?？」

フェイト

「【ソウル】!?？」

【なのは】と【ユーノ】の姿を見た瞬間、突然の頭痛で頭を抱える。  
フェイト

「あなた達には関係ない。ただ、このまま《ジュエルシード》を集め続けるならわたし達の敵。それだけ……」

そして、【フェイト】は【ソウル】に肩を貸しながら、その場から飛び去っていく。

ユーノ

「いったい何者だったんだ、あの2人は？」

なのは

「うん。でも魔導師としては確実にあの子が上。わたし、手も足も出なかった」

ユーノ

「そうだね。それにあの顔を隠していた方、【なのは】や【征騎】と比べれば魔力こそ低いはずなのに、それを補うほどの戦闘技能を持っていた」

わたしの前に現れたあの金髪の子。同じ魔導師なのにあの子の方が強かった。今のわたしじゃ比べものにならないくらい。ただあの子わたしに向かって言ったあの一言がわたしの中にいまだに引っかかっていた。

なのは

「ごめんね……って、なんであの子あんなことを？それに、あの人……」

あの金髪の子と一緒にいた男の子。

なのは



「どうしてあの人を見た瞬間懐かしいって思ったんだろう？」  
あの人を見た瞬間、わたしが感じたことはそんな気持ちだったひと  
つだった。

T o b e c o n t i n u e

## 第10話 『男は狼なのよ』

〃〃ソウル視点〃〃

なのは

「いつてきま〜す!」

そう言いながら家から学校へ向かう【なのは】。そんな何気ない光景を離れた建物の屋根の上から見る影が一人。

ソウル

「あれが、今のところ確認できる俺たち以外の魔導師の一人か……」

そう呟きながら、俺は彼女の後ろ姿を見送る。

ソウル

「制服姿を見るに、学校へ向かうところか。前に戦ったあの男もそうだが、魔力量を除けば、幼く、魔導師としては全くの素人だな。まあ、直に接触してみないとなんとも言えんが」

俺たちが先日戦った魔導師達の実力は、一人は自分が直接戦ったことで、年齢故の幼さからか、膨大な魔力とそれにもものを言わせた大規模な魔法に胡座をかいているだけの、正直実力不足もいいところだが、彼女の実力については「フェイト」から聞いたこと以外は全くの未知数と言っている。彼女の実力を直に知っておくために俺が直接出向いてきたのだ。しかし、こんな離れた場所で見てもなにもならないが、近づきすぎて逆に気付かれても話にならない。

※事実、一度だけ彼女のSECOMと言っている2人に感づかれそうになったのは別の話。

桃子

「ちよつと【なのは】!お弁当忘れてるわよ!ああ、行っちゃった……」  
すると、母親と思しき人物が彼女のお弁当を忘れたことに気づき呼び止めたが一足遅く、彼女が乗ったバスは走り出してしまう。

ソウル

「ほお、ちようどいい。こんなに早く接触するチャンスが舞い込んできたな。となれば、アレを使うか……」

彼女への接触を図る作戦を思いつき、俺は行動を起こす。

桃子

「どうしましょう。届けに行きたいけど、お店もあるし……」

【桃子】は【なのは】が忘れていった弁当を片手に悩む。そんな時、彼女の前にそれが現れた。

桃子

「ぎゃっ!? えっ? い、犬?」

それは、銀混じりの白い毛並みの犬と言うには若干大きく、狼と見間違ふ姿の、【ソウル】が《変身魔法》で変身した姿で現れたのだ。

※この姿を【フェイト】達に見せた時、【アルフ】が若干意識していたのは別の話。

【ソウル(犬)】は黙って【桃子】の持つ弁当を見た後、【なのは】が行った方を一瞥。

桃子

「もしかして、届けてくれるの?」

ソウル(犬)

「・・・(コクン)」

【桃子】が【ソウル】が何をしたいのか理解して、弁当を彼に差し出す。【ソウル】は領き弁当を啜えて颯爽とバスを追いかけ姿が見えなくなる。

桃子

「うーん、なんか普通の犬と気配が違う気がしたけど、悪い感じはしなかったから大丈夫よね」

そんなことを考えながら、【桃子】は家の中へと戻って行くのだった。

【ソウル】は町を駆けバスを追い、【なのは】の通う学校が見えてきた。

すると、ちょうどバスが校門前に止まり、彼女が降りてくる。それと同時に【ソウル】が【なのは】の前に滑り込む。

なのは

「わっ!? な、なに、大きな犬?」

【なのは】も突然現れた大きな犬に驚いて尻餅をつく。  
なのは

「ふえ？わたしのお弁当？もしかして届けてくれたの？」

【ソウル（犬）】は啜えていた弁当を彼女の前に差し出す。【なのは】はキョトンとした顔をしながらそのまま弁当を受け取る。

なのは

「え、えーと、どこの子か知らないけど、ありがとう」

【なのは】は普通の犬だと思いながら、感謝の気持ちを込めて【ソウル】を撫で回す。

ソウル

（俺のことを犬と信じきって、全く警戒心を持たないとは。本当に魔導師かと疑いたくなる。けど、単純に考えればこれが年相応の女の子だな。【フェイト】も本来なら……）

【ソウル】も【なのは】の観察をしながら犬になりきっている。

???

【なのは】ちゃん大丈夫？その犬、【なのは】ちゃんのところの子？」

なのは

「あ、【すずか】ちゃん。ううん、知らない子だけど、わたしのお弁当を届けに来てくれたの！」

すずか

「へ〜〜すごいお利口な子なんだね。どこかで飼われてるのかな？」

【なのは】の友人である【月村 すずか】も、【ソウル】のことを不思議そうに見ながらその腰を優しく撫で回す。

???

「あんたオスね。かなり珍しい毛並みだけど、あまりこちら辺じゃ見かけないわね……」

ソウル

「ギャワン！（っていつの間に!?!?!）」

なのは

「ぎ、さすが【アリサ】ちゃん、犬のことになると手が早い……」

彼女のもう一人の友人の【アリサ・バニングス】は、生粋の犬好き

ということもあり【ソウル】のこを見つけるなり、【ソウル】が気付く間も無くその身体の隅々を撫で回しながら観察しだす。

それを発端に、学園の敷地内に入ってきた犬十まつたく人に吠えない十周りは小学生ということと相まって、他の生徒達も我先にと【ソウル】の周りに集まってきた。

ソウル

（やばい……すぐにここを離れたいが、この【アリサ】とか呼ばれた金髪、全然離れようとしな）

下手に目立つことを恐れ、彼女を振り落とすこともできずいいように身体を弄られる【ソウル】。

しかしその空気を破るように、【ソウル】は跳び上がると足元に何かが飛んでくると地面に激しくバウンドして転がる。それはなんの変哲もないサッカーボールだった。

アリサ

「ちよつと【征騎】！危ないじゃないの！当たったらどうすんのよ！」

征騎

「おいおい心外だな。僕はきみが猛犬に襲われてると思つて咄嗟にこれを蹴っただけなのにさ」

サッカーボールを蹴ってきた人物は、これまた先日戦つた【征騎王土】だ。周りは練習用のユニフォームを着ているのに対し【征騎】は制服姿。どうやら朝練をしていたサッカー部の練習に乱入していたようだ。ただ……

ソウル

（あいつ、一般人相手に《身体強化》の魔法を使つている）

【ソウル】が一目見た瞬間、【征騎】が《身体強化》でプレイをしているのだと見破る。

ソウル

（あの性格だ、大方周りに自分の能力を誇示させたいだけだろうが。魔法を使ってまですることとは思えない。そっちがその気なら……）

【ソウル】は転がっていたボールを上投げると頭でリフティングを行う。

征騎

「おい野良犬、さっさとボールをこつちに……」

【征騎】がボールを奪おうとした瞬間、相手の脇をすり抜け、そのまま器用に頭でドリブル。そのままシュートを決める。

その光景に、周りの全員が呆気に取られていた。

ソウル

「ふんっ！」

征騎

「ツ！こ、この犬風情がつ！」

【ソウル】  
犬 相手に鼻で笑われたことに逆上し、【征騎】とそのまま試合を再開する。

？数分後？

【ソウル】が入る前まで、《身体強化》をした【征騎】によりかなり点数をつけられていたようだが、【ソウル】が入った途端その点差はみるみる縮んでいく。

犬が試合に入ってきたことに味方チームは最初こそ戸惑っていたが、【ソウル】が的確なパス回しに安定したチームワークでプレイに臨んでいるのに対し、1人《身体強化》をしている【征騎】についていくことができず必然的に【征騎】のワンマンプレイにはしりだす。

そして点数も同点となり、残り時間もわずか。

征騎

「この野郎！これいじょう犬なんかいい格好させるかよ！」

【ソウル】がボールをとり、ゴールに向かってドリブルをしていると、完全に【ソウル】1人（匹）に狙いを定めた【征騎】がスライディングをする。が、【ソウル】はこれを跳んでかわす。

征騎

（ニヤリ）

ソウル

「ツ！！？」

すれ違った瞬間、【征騎】が不敵に笑うと、他の人間から見えないように攻撃魔法を使って妨害をしてきたのだ。【ソウル】はそれをすん

だのところ、身を捻って躲すが、そのまま体制を崩されてしまう。それを狙い【征騎】は【ソウル】の身体ごとボールを蹴り飛ばしたのだ。

ソウル

「ガハッ！」

鋭い衝撃が【ソウル】を襲うが、【ソウル】はそのままボールの衝撃を逃しながらうまく味方チームへパスを繋ぎ、味方チームがシュート。その瞬間、試合終了のホイッスルが鳴る。【ソウル】はそのまま地面に着地すると、そのまま学校から走り去って行く。

アリサ

「【征騎】！あの子にあんなことするなんてほんとうに最ッ低！あたし、さっきの子のことが心配だから追いかけるわ！」

すずか

「待って【アリサ】ちゃん！わたしも行くよ！」

【ソウル】の傷が気になった【アリサ】達は【ソウル】の後を追いかける。

《聖祥学園》から走り去った【ソウル】は少し離れた物陰に身を隠す。

ソウル

「痛つつ……まさかあの場で攻撃魔法まで使ってくるとは。相手を甘く見ていたな」

あの男の方にボールを当てられた箇所は《身体強化》をしていたことも相まってか、青黒く変色している。これは下手すれば骨までいつているかもしれない。その箇所を《回復魔法》で応急処置をしながら、先程のことを反省。パツと見た感じ女（女の）の子の方は年相応のこともあり警戒心が薄く、魔導師として目覚めて日が浅いためまだ素人だが、もしかしたら化けるかもしれない。男の方はと言えば魔力が一人前ということ以外に、平然と攻撃魔法使うなど、あの周りを顧みないところは逆に危険とも言える。

ソウル

「とりあえず、まだまだ油断はできないってところか……ん？」

何やら誰かを呼ぶ声がして、そつと顔を出して覗く。

アリサ

「ちよつとー！さっきの子ー！出てきなさいー！」  
すずか

「【アリサ】ちゃん、そんな呼び方で出てくるわけないと思うよ」  
アリサ

「う、うるさいわね、【すずか】、あの子の名前知らないんだからしょうがないじゃない！」

先程の女の子の友人らしき2人がここまで追いかけて来たらしい。  
ソウル

「迂闊に姿を見せる訳にはいかないな。ここは、彼女達がいなくなるまでやり過ぎるのが……」

アリサ  
「ちよつとー！何よあんた達！放しなさい！」  
すずか

「やめて！【アリサ】ちゃんに酷いことしないで！」  
と思った瞬間、彼女達の前に一台のワンボックスカーが止まり、無理矢理2人を車に詰め込んだのだ。  
ソウル

「なっ！？おい待てっ！」  
慌てて物陰から飛び出すが、一歩遅く車は走り去って行く。  
なのは

「そんな、【アリサ】ちゃん!!？【すずか】ちゃん!!？」  
遅れて【なのは】も駆けつけたが一歩遅く、2人が誘拐されてしまったことに呆然と立ち尽くしていた。

そんな彼女を横目に【ソウル(犬)】は【なのは】を頭で小突くと、彼女のポケットを叩く。

なのは  
「ふえ？もしかして、大人の人に連絡しろって？」  
ソウル

「・・・(フィッ)」  
なのは



「アツ!??ちよつと!」

【なのは】が【ソウル】の意を理解してポケットから携帯を取り出すのを確認すると、1人(匹)車が走り去って行った方へと追いかけていった。

くくすずか視点くく

アリサ

「ちよつとあんた達!あたし達にこんな目に合わせて絶対に許さないんだから!」

誘拐犯

「うっせえぞ、ガキども!大人しくしてりゃこっちも手荒な真似はしねえんだからよ」

すずか

「・・・ヒッ!」

誘拐犯が拳銃を取り出し、私たちに突きつけられ恐怖で黙り込む。

誘拐犯

「ケケッ!楽な仕事なもんだ。《バニングスコーポレーション》と《月村工業》の令嬢を誘拐して町外れの廃工場に運ぶだけで大金が手に入るんだからよ」

誘拐犯の話からこの人たちはお金で雇われた人たちで、私と「アリサちゃん」はそこへ運ばれているみたい。

誘拐犯

「しかしどういうわけだ?目的地に着いたら《月村工業》の御令嬢は人間じゃねえって指摘しろってのは?」

すずか

「・・・ツ!??」

この人達を雇った人はどこまで私たちの・・・私たち一族のことを知っているの。

アリサ

「ちよつと!「すずか」が人間じゃないって?冗談言ってるんじゃないわよ!」

「アリス」ちゃん……」

「アリス」ちゃんは必死に庇ってくれているが、彼女は知るはずがない。友人にも決して言えない私の正体を。」

誘拐犯

「たく、五月蠅えガキだな。しかし、人間じゃねえってなら多少手荒に扱っても構わねえよなあ?」

誘拐犯

「へっ、ロ○コンが。まあ、目的地に着くまで退屈だ。精々、楽しませてもらおうとしますか」

「アリス」ちゃん

「や、やめて……来ないで……」

誘拐犯の人達が不気味な笑みを浮かべる。そう、それはまるで、【征騎】君が私たちに向けるような。

誘拐犯（運転手）

「おい、俺を抜きにしてお楽しみしないでくれよ?」

誘拐犯

「ケッ・テメエはしっかり運転しとけばいいんだよ!」

運転手

「へいへい……って、ウワア!?!?」

突然運転手が悲鳴を上げ急ハンドルを切ったかと思えば、激しい揺れが私たちを襲ってきたのだ。

くくソウル視点くく

何を考えているんだろう。俺の目的はあの女の子の感じだったはず。故に派手な行動は控えるべきなのに。」

ソウル

「けど、目の前で【フェイト】と同じ年の子が大変な目に遭ったんだ。理由はそれだけでいいさ」

そう考え、あの2人を乗せた車を追う。人の身であれば到底追いつけるはずない。けど今の俺は魔導師。そして1匹の獣。

ソウル

「獣ならなにも考えるな。本能のままにただ獲物を追いかけるだけだ」

動物としての身体能力の速さと身体強化の魔法の掛け合わせにより目にも止まらない速さまで上がり、あつという間に獲物を捉え、車を追い越しざま即座にUターン。相手の車の前に飛び出し、そして相手が自分を避ける為にハンドルを切った際、すれ違いざまに車のタイヤにその爪を立てパンクをさせたのだ。

※ちなみに車を視界に捉えた時点で周囲に結界を展開して車を閉じ込めておいた。

制御を失った車はそのままガードレールに擦り付けながら停車。誘拐グループは車を捨て、「アリサ」と「すずか」の2人を連れ出すが、2人を捕まえていた誘拐犯の1人を突進で突き飛ばし、間に滑り込む。

すずか

「きみ、さっきの……」

アリサ

「助けてくれたの?」

「ソウル」は2人を一瞥しすぐに誘拐犯へと向き直る。

誘拐犯

「チイツ!高い金貰ってんだ!」

誘拐犯

「こんな犬ところ1匹に邪魔されてたまるか!」

誘拐犯は銃まで取り出し、街中であるにも関わらず発砲。もしも結界を展開していなければパニックになっていただろう。

しかし、素人さながらの狙いを定めて撃っているわけでもない乱射に、「ソウル」は銃弾を掻い潜り、弾切れを狙ったところで相手の懐へ入り込み、誘拐犯の2人を同時に倒す。

ソウル

(拳銃こんな物まで持ち出しておきながら正直拍子抜けだ。こいつらの口ぶりからして、所詮は金で雇われた程度の連中ってところか)

拳銃や相手の人数などものともせず、次々と誘拐犯を倒していく【ソウル】。しかし無意識に左手を握って開いてを繰り返していた。

誘拐犯

「こ、コノオー！こんな犬相手に終われるかよ！」

ソウル

「ハッ？？？しまっ……」

当身が甘かったのか、先に倒していたはずの誘拐犯の1人がよろよろと目を覚まし、持っていた銃を発砲。【ソウル】も油断していて反応が遅れてしまう。

すずか

「危ない！」

アリサ

【すずか】！

しかし【ソウル】を庇って彼の前に【すずか】が飛び出し、その凶弾を受けてしまったのだ。

ソウル

「ダメエ！」

誘拐犯

「ガボオッ！」

【ソウル】は変身魔法を解除し人間に戻り、勢いよく飛び出しながら誘拐犯を殴り飛ばす。

誘拐犯達を制圧することこそできたが、

アリサ

【すずか】、【すずか】！お願いしつかりして！

銃弾に倒れた【すずか】。彼女から止めどなく血が流れ出す。

ソウル

「さがつてろー！チイツ、回復魔法は苦手なんだが……」

【アリサ】を退け、【ソウル】は【すずか】に応急処置として回復魔法を使うが、もともと回復魔法は不得手なこともあり、彼女の治療の見込みは正直なところ五分五分といったところ。

すずか

「ハアハア……だい・・じょうぶ・・だから……少しだけ・・その、血を・・くれれば……」

アリサ

「【すずか】、あんたこんな時なに冗談言ってる……」

「【すずか】の突然の発言に呆れた顔を浮かべる【アリサ】。

しかし、【ソウル】は神妙な面持ちになりながら、

ソウル

「血させあればなんとかなるんだな？」

すずか

「……(こくん)」

【ソウル】の問いに【すずか】は静かに頷く。

すると、【ソウル】は自分の指を切りつけ、血を滴らせながらその指を【すずか】の口へ運ぶ。

すずか

「……ッ!??ハプッ!チュ、ぴちや、んちゅ……」

ソウル

「(うっ、いかん。小学生のはずなのに妙な色気が……) なっ!??これは……」

自分の指をしゃぶりながら血を啜る【すずか】が出す雰囲気は軽くドギマギしていると、【ソウル】の回復も相まり、彼女の撃たれた傷が早戻しのように塞がっていったのだ。

アリサ

「【すずか】、あんた・・それ……」

すずか

「ハアハア……これが、あの誘拐犯の人たちが言ってた人間じゃないって意味。あなたの血を吸っていたように、わたしは、普通の人たちとは違う、わたし達の一族は、夜の一族”って呼ばれる、いわゆる吸血鬼なんだよ。怖いよね。友達にずっと黙ってて、わたしがこんな化物なんて……」

アリサ

「【すずか】……」

【すずか】は瞳に涙を浮かべながら怯えた様子で、自分が普通の人間とは違う存在だと告白。友達にも隠していたことを話すのは辛いものだったはず。

アリサ

「バカー……！」

すずか

「ふえ？ア、【アリサ】ちゃん？」

それを聞いた【アリサ】は【すずか】を声を荒げる。その目に涙を流しながら。

アリサ

「あたしは、【すずか】が吸血鬼だって知ったことよりも、あんたが目の前で撃たれた時のことの方がよっぽど辛かったんだからね！あんたが自分を化物だって言おうがあたしにとっては大事な友達に変わらないんだから！いままでも、これからも！」

すずか

「【アリサ】…ちゃん……ウウ……じゃあ、これからも一緒にいてもいいの？」

アリサ

「グスッ！当たり前でしょ！同じこと何回も言わせないでよ！」

嬉しさのあまりなかなか泣き止まない彼女達。彼女達を慰めるためなのか、不意に【ソウル】は2人の頭をそつと撫でる。

アリサ

「ふにや!!?…ちよ、ちよつとなにするのよ!!?…////」

すずか

「ふえ!!?…あわわわ!////」

ソウル

「ああ、すまん。つい……」

突然のことに動揺する2人。【ソウル】は手を離しながら、先程までと打って変わっての彼女達の元気に、2人を優しい眼差しで微笑む。

アリサ

「・・・ッ！つて、あんたさつきの犬・・・よね？」  
すずか

「うん…… それに、わたしを治療したあの力って……」

ようやく冷静さを取り戻した2人は【ソウル】が犬から人の姿に変わったことと、【ソウル】が使った魔法がなんなのか問いたです。

ソウル

「・・・キミたちハナニモミナカッタ」

【ソウル】はその一言を残し、再び白狼に姿を変え、建物の壁を蹴り高く跳びそのままあつという間に彼方へ走り去っていくのだった。

くくアリサ視点くく

アリサ

「なんだったのよアイツ……」

あの誘拐で、あたし達を助けたあの謎の男子のことが忘れられないでいた。もちろん、犬から変身したこともそうだが、それ以上に、

アリサ

「アイツソウルに撫でられた時、全然嫌な気はしなかったわね／＼／＼」

身近で面識のある男子って言ったら、【征騎】とその取り巻き以外いないし、【征騎】に至っては下心丸出しで気安く何回も撫でてこようとして、正直良い気分はしていないのに、同じようにアイツに撫でられたうえ、あんな顔を見せられてから、それを思い出すたびに胸の高鳴りが治らない。

アリサ

「ウガアア！このあたしが、あんなヤツにこんな気持ちにされるなんてあり得ないんだから！アイツが狼男だろうが何者だろうが関係ないわ！今度会った時は、あたしが調教してやるんだからー！」

精一杯の照れ隠しの虚勢を張る【アリサ】だった。

くくすずか視点くく

すずか

「……………」

あの助けてくれた男の子のことを思い出しながら、自室で1人いつものように”一族”としての吸血鬼体質からパツクに入った血液を一口啜る。が、すぐに机に置く。

すずか

「やっぱり、美味しくないよね……」

元からおいしいと思っていなかったが体質故に摂取せざるを得なかった。なのに、あの男の子から吸血してからいつも以上に美味しきを感じられない。”一族”の事情としてお姉ちゃんにも相談したら、なぜか屋敷のみんな優しい顔をしていた。

(※その際夕食がお赤飯だったのはここだけの話)

すずか

「また、会いたいなあ」

自分の指を唇に添えながら物思いに耽る。部屋の鏡に映った彼女の姿は、年不相応な妖艶な雰囲気を感じていた。

T o b e c o n t i n u e